

神戸市西区

吉田南遺跡

-地域ケア開発研究所建設事業に伴う発掘調査報告書-

2006年3月

兵庫県教育委員会

神戸市西区

吉田南遺跡

-地域ケア開発研究所建設事業に伴う発掘調査報告書-



調査地点遠景
上空北から



調査区全景
上空西から



SD201土器出土状況（北から）



SD201土器出土状況（西から）



SD205土器出土状況（北から）



SK207出土土器状況（南から）



須恵器頭部出土状況（北から）



調査地点（調査前・南東から）



学内説明会風景



現地説明会風景

例　言

1. 本書は、兵庫県神戸市西区玉津町吉田字足田に所在する吉田南遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 発掘調査は、地域ケア開発研究所建設事業に関連して、兵庫県立看護大学（現：兵庫県立大学）の依頼を受けて、平成15年度に実施した。
3. 整理作業については、兵庫県立大学の依頼を受けて、平成17年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。
4. 遺物写真的撮影は、株式会社アコードと委託契約を交わして、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。
5. 本書の各遺構図面で使用している基準は座標北を示し、水準は東京湾平均水準（T.P.）を使用した。
6. 本書で使用した地図は下記のとおりである。

第2図 国土地理院1/25000地形図「東二見」、国土地理院1/25000地形図「前間」

国土地理院1/25000地形図「明石」、国土地理院1/25000地形図「須磨」

7. 石器に付着した赤色物の分析を（株）パレオ・ラボに委託し、その結果については附録に掲載した。
8. 本書の執筆は、附章を除いて鐵　英記が担当した。編集は、岸野奈津子の補助を得て鐵が行った。
9. 吉田南遺跡の調査成果は既に現地説明会等で公表している。これらと本報告では内容を異にする部分もあるが、本書が最新の担当者の見解と理解されたい。
10. 調査・整理にあたっては下記の方々および機関のご協力・ご指導をいただいた。記して謝意を表します。

神戸市教育委員会　　間壁賀子

順不同・敬称略

凡　例

遺構

本書では、遺構は種類ごとに以下の略号を用いた。

SB：掘立柱建物 SD：溝 SH：堅穴住居 SK：土坑 SP：柱穴

SX：土器溜まり

遺構名は原則として調査時に命名したものを用いているため、一部に不統一な遺構名があることを理解されたい。

遺物

土器　　土器の断面は、弥生土器・土師器は白抜き、須恵器は墨塗りである。

石器　　他の遺物とは、番号の前にSをつけて区別している。

本文目次

第1章はじめに	(1p)
第1節 調査にいたる経緯	
第2節 確認調査・本発掘調査の経過	
第3節 整理作業の経過	
第2章 遺跡の位置と環境	(3p)
第1節 遺跡の位置	
第2節 地理的環境	
第3節 歴史的環境	
第3章 調査の成果	(6p)
第1節 基本層序	
第2節 遺構	
第3節 遺物	
第4章まとめ	(22p)
附章 磨石付着赤色物の顔料分析	(24p)

報告書抄録

卷首図版目次

卷首図版 1

調査地点遠景 上空北から／調査区全景 上空西から

卷首図版 2

SD201土器出土状況（北から）／SD201土器出土状況（西から）／SD205土器出土状況（北から）

SK207土器出土状況（南から）／須恵器鹿頭部出土状況（北から）／調査地点（調査前・南東から）

学内説明会風景／現地説明会風景

挿図目次

第1図 遺跡の位置.....	(1p)
第2図 周辺遺跡分布図.....	(4p)
第3図 鹿頭部実測図	(18p)
第4図 石器・石製品実測図	(18p)

表目次

第1表 周辺遺跡一覧表.....	(5p)
第2表 出土土器・土製品観察表（1）	(19p)
第3表 出土土器・土製品観察表（2）	(20p)
第4表 出土土器・土製品観察表（3）	(21p)

図版目次

図版 1 上層遺構平面図

- 図版2 下層遺構平面図
図版3 調査区北壁・土層断面図
図版4 SH01・02 平・断面図
図版5 SH03・04・05 平・断面図
図版6 SH06・SB01・02 平・断面図
図版7 SD201・202・205・207・208 平・断面図
図版8 SD203・204・206・209・210 平・断面図
図版9 SD213 平・断面図
図版10 SD211・212・SK201 平・断面図
図版11 SK202・203・207 平・断面図
図版12 SK204・205・206・208・209 平・断面図
図版13 遺構出土遺物 1
図版14 遺構出土遺物 2
図版15 遺構出土遺物 3
図版16 遺構出土遺物 4
図版17 遺構出土遺物 5
図版18 遺構出土遺物 6
図版19 遺構出土遺物 7
図版20 包含層出土遺物 1
図版21 包含層出土遺物 2

写真図版目次

- 写真図版1 調査地点遠景 上空西から／調査区全景 上空北東から
写真図版2 上層遺構全景 東から／上層遺構北から／下層遺構全景西から
写真図版3 下層遺構部分 北から／竪穴住居・溝 北から／竪穴住居・溝西から
写真図版4 SH01 北から／SB01 南西から／SB02 南西から
写真図版5 SK203 西から／SK201土器出土状況 東から／SX01土器出土状況 西から
写真図版6 出土遺物 1
写真図版7 出土遺物 2
写真図版8 出土遺物 3
写真図版9 出土遺物 4
写真図版10 出土遺物 5
写真図版11 出土遺物 6
写真図版12 出土遺物 7
写真図版13 出土遺物 8
写真図版14 出土遺物 9
写真図版15 出土遺物 10

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

平成5年4月に開学した兵庫県立看護大学（現：兵庫県立大学看護学部、明石キャンパス）は、明石川下流域でも屈指の集落跡である吉田南遺跡の範囲内に位置している。平成14年、大学では健康に関するニーズの多様化を受けて、地域の特性にあった質の高いケアサービス提供することを目的とした実践研究施設（現：地域ケア研究所）を構内に整備することを決定した。施設の予定地としては、当時の大学主要施設に南接する駐輪場が選ばれたが、この地点も周知の埋蔵文化財包蔵地である吉田南遺跡の一部にあたることが予想された。

そもそも吉田南遺跡は、昭和51年に看護大学北隣に位置する神戸市玉津環境センターの建設に伴う発掘調査で発見された遺跡で、古墳時代の集落跡や明石郡衙の可能性が指摘される奈良時代の遺構群等が検出されている。その後、県立成人病センターの設置時や農業試験場跡地利用計画策定時における確認調査、県立看護大学建設に伴う調査の結果、弥生時代から中世・近世にかけての集落跡・水田跡等が広範な範囲にわたって検出されている。

今回の事業地は看護大学設置時の調査におけるA地区の南側、B地区の西側に当たる。その際の調査では、弥生時代から近世にいたる遺構が検出され、A地区南端では4面、B地区の近接地点では2面の遺構面が調査の対象地になった。したがって、今回の事業地内にも遺構の存在が予想され、兵庫県教育委員会が発掘調査を実施することとなった。

第2節 確認調査・本発掘調査の経過

確認調査

前述のように、事業予定地には遺構の存在が予想されたが、これまでの調査成果からみて遺構面の起伏が激しい可能性があり、調査すべき面数も確定できないため、遺跡の範囲・内容等の概要を把握する



第1図 遺跡の位置

目的で確認調査を実施した。

調査は現存する建物および地下埋設物を避けるかたちで、事業地東南隅に幅2m、長さ15mのトレチを設定し、バックホウによる掘削を実施した。人力にて平面・断面の精査を行い、遺構・遺物の発見に努めた。

調査の結果、現地表面から1.2m下で暗灰灰色シルト層を検出し、おおむねその上面で中世の遺構が、下面で弥生時代末から古墳時代の遺構・遺物が検出された。

調査期間 平成15年7月15・16日

調査担当者 企画調整班 主査 甲斐昭光

調査第1班 主査 鐢 英記

本発掘調査

確認調査の結果、中世（上層）および弥生時代末から古墳時代（下層）の2遺構面が確認されたため、研究所建設によって埋蔵文化財が影響を受ける840m²の範囲を本発掘調査することとなった。

調査地点は駐輪場として利用されていた部分を含むため、アスファルト舗装・コンクリート基礎等の構造物を撤去した後、バックホウにより上層遺構面直上まで慎重に掘り下げた。人力による遺構精査・検出を行った後、写真撮影および遺構の実測を行った。

統いて、人力によって下層遺構面まで掘り下げ、人力により遺構精査・検出を実施した。それと並行して、写真撮影・遺構細部の実測を行うとともに、写真エンジニアリング株式会社に委託して、ヘリコプターによる空中写真の撮影および航空測量を実施した。遺跡の掘削土は校内運動場の一角に仮置きした。残土の運搬にあたっては、キャンパス内を通行するため、夏休み期間中といえ学生・教職員の往来もあることから安全には留意し、粉塵等の発生も抑えるよう努めた。最後に、調査地点を埋め戻して調査を完了した。

なお、調査期間中の9月29日には看護大学学内対象の遺跡説明会、10月4日には一般対象の遺跡説明会を実施し、調査成果を県民に公開するよう努めた。

調査期間 平成15年8月18日から10月16日

調査担当者 調査第2班 久保弘幸

調査第1班 鐢 英記

第3節 整理作業の経過

吉田南遺跡の整理作業は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において、平成17年度にネーミング・土器接合・復元補強・実測・トレース・レイアウト・写真撮影を実施した。

整理担当職員 整理保存班 主査 別府洋二 主査 藤田 淳主任 岡本 一秀

整理技術嘱託員 長谷川洋子 早川亜紀子 伊藤ミネ子 家光 和子（ネーミング）

眞子ふさ恵 島村 順子 木村 淑子 中田 明美

小野 潤子 三好 純子 奥野 敏子 又江 立子

荒木由美子 藤池かづさ（土器接合・復元補強）

岸野奈津子（実測・トレース・レイアウト補助）

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置

吉田南遺跡は神戸市西区玉津町吉田に位置する。近傍を瀬戸内海側と北播磨・丹波を結ぶ国道175号線が南北に走り、神戸・明石・姫路を結ぶ第2神明道路や国道2号線が東西に敷設されており、現在における交通の要衝となっている。

この地域が、現在のみならず古くから交通の要衝であったことは歴史的にも確認されている。神戸市西区は神戸市灘水区・明石市域も含め、旧国名で言うと播磨の東端である明石郡にあたり、古代山陽道も敷設されていた。玉津町吉田付近はほぼその中央に位置し、吉田南遺跡は明石郡衙あるいは明石駅家の推定地の一つに挙げられている。

第2節 地理的環境

吉田南遺跡は現在の海岸線から約2.5km遡った明石川下流域右岸の低位段丘面に立地している。

遺跡の存在する明石平野は、六甲山地の西側に位置し、丘陵や段丘を刻む狭長な谷部に展開している。平野を流れる明石川は、長坂山に源を発し、櫛谷川・伊川と合流して播磨灘に注いでいる。

前葉和子氏の研究によると、明石川流域の中流域から下流域にかけては丘陵に接して段丘が発達している。これらの段丘は形態的な特徴から6面に分類できるが、現在のところその編年や対比が確立しているわけではない。

また、流域沿いの狭隘な谷部に展開する沖積平野は、完新世段丘と現氾濫原に分類される。完新世段丘は比較的新しい時期に形成されたため、段丘化以前の微地形を読みとることができ、古くからの集落が凸地に営まれていることがわかる。

第3節 歴史的環境（第2図：表1）

旧石器・縄文時代

野々池周辺（出合遺跡：6）で石器の採集は報告されているが、旧石器時代の確実な遺跡は見つかっていない。

縄文時代では、明石川支流の伊川流域で長坂遺跡が調査されている以外に、明石川流域で目立った集落の調査例はないが、丘陵縁辺部を中心に縄文人の活動域が広がっていたことは確かなようである。

弥生時代

弥生時代にはいると、明石川流域における遺跡数は増加を始める。前期古段階の土器が出土した吉田遺跡（4）は学史上名高いが、その他にも新方遺跡（20）や玉津田中遺跡（10）といった弥生時代の拠点集落となる遺跡の形成が吉田遺跡よりやや遅れて始まる。

中期になると沖積平野に立地する新方遺跡、玉津田中遺跡、南別府遺跡（21）等が集落規模を拡大し、拠点集落としての体裁を整えていく。中期後半になると、沖積地から段丘上へと集落域が拡大していく、明石川と櫛谷川に挟まれた丘陵一帯にも集落が営まれる。

後期にはいると、それまでは大規模な集落がなかった場所に新たな集落が出現する。今回報告する吉田南遺跡（1）もその例の一つである。それとは別に青谷遺跡（15）・城ヶ谷遺跡（14）といった丘陵上に営まれる集落が出現する。



第2図 周辺追跡分布図

古墳時代

集落は弥生時代後期に集落が営まれていた新方遺跡、玉津田中遺跡、吉田南遺跡等で引き続き人々の生活が認められる。

明石川流域では明確な首長系列を示すような大規模古墳は確認されていない。しかし、前期の古墳としては支流の伊川水系で、天王山古墳（16）や最近の調査で石製腕飾類が多数出土した白水瓢塚古墳（17）が存在している。中期になると明石川中流域の盟主墳と考えられる王塚古墳（5）が出現する。後期にはいると丘陵部に群集墳が形成される。そして、出合遺跡で初期須恵器が焼かれた可能性が指摘されているが、この墳から専業的な手工業生産が始まり、明石市の赤根川窯、高丘窯といった須恵器窯がそれぞれ生産を開始する。

古代

飛鳥時代から奈良時代に関しては、前代に登場し四天王寺の隅尾を焼いたことで知られる高丘窯跡群や白鳳時代創建の寺院跡と考えられる太寺遺跡（22）以外は良好な資料・遺跡に恵まれていなかったが、近年新たな知見がもたらされている。

和坂遺跡（3）では古代山陽道の道路側溝と思われる溝が検出されている。太寺遺跡は寺院跡と考えられているが、同時に播磨国府系瓦の出土もあり、吉田南遺跡と並んで明石郡衙・明石駅家の推定地である。また、同遺跡の南側に位置する天文町遺跡では播磨国府系瓦が出土しており、明石川下流に律令期の重要拠点があったことを伺わせる。

中世

院政期の京都・六勝寺に瓦を供給していた瓦陶兼業窯である神出古窯跡群や神出古窯跡群に変わって須恵器生産中心となる魚住古窯跡群等、明石川流域は中世前期における一大窯業生産地であった。

それに対応するように、二ッ屋遺跡（12）では平安時代末の屋敷地が発見されており、平家の被官であった在地領主層のものではないかと考えられている。また、玉津田中遺跡においても存続時期は短いものの中世居館が見つかっている。

番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期
1	吉田南遺跡	弥生時代～中世	15	青谷遺跡	旧石器時代～弥生時代
2	北王子遺跡	弥生時代・平安時代	16	天王山古墳	古墳時代
3	和坂遺跡	古墳時代～中世	17	白水瓢塚古墳	古墳時代
4	吉田遺跡・枝古城跡	弥生時代・中世	18	今津遺跡	弥生時代～古墳時代
5	汇塚古墳	古墳時代	19	裡遺跡	古墳時代
6	出合遺跡	旧石器時代～中世	20	新方遺跡	弥生時代～中世
7	居住・小山遺跡	弥生時代～中世	21	南別府遺跡	縄文時代～中世
8	丸塚遺跡	弥生時代・中世	22	太寺遺跡	奈良時代～中世
9	小山遺跡	弥生時代・中世	23	上ノ丸四貝塚	弥生時代
10	玉津田中遺跡	弥生時代～近世	24	上ノ丸貝塚	弥生時代～古墳時代
11	芝崎遺跡・福中城跡	弥生時代・近世	25	上ノ丸遺跡	弥生時代
12	二ッ屋遺跡	弥生時代～中世	26	人丸塚古墳	古墳時代
13	菅野遺跡	弥生時代～古墳時代	27	天文町遺跡	奈良時代
14	城が谷遺跡	弥生時代			

表1 周辺遺跡一覧表（表の番号は図2の番号と一致する）

参考文献 前葉和子「玉津田中遺跡周辺の地形環境」「玉津田中遺跡調査概報」（1984）
兵庫県教育委員会編「玉津田中遺跡－第3分冊」（1995）

第3章 調査の成果

第1節 基本層序（図版3）

調査地は水田を埋め立てて駐輪場として利用していた。0.8から1mある盛土を取り除くと、一部で盛土前の耕作土が残存している（2層）。

その下には浅黄色から灰黄色のシルト・細砂（3～6層）が堆積している。これらの層は中世から近世にかけての水田土壤と考えられる。

これらを除去した時点で、暗灰黄色粘質シルト層（7層）が現れ、その上面で検出されるのが第1遺構面である。第1遺構面がのる暗灰黄色層には弥生時代末から古墳時代の遺物が包蔵されており、これを除去すると黄灰色粘質シルト層（8層）が現れ、第2遺構面のベースとなっている。第2遺構面は西側に向かって少しづつ下がっており、今回の調査区東半が微高地状の高まりになっていたと考えられる。

第2節 遺構

第1遺構面（図版1、写真図版2）

この遺構面では溝を11条検出した。遺構の先後関係をみると三つの段階があるが、遺構の埋土はいずれも灰黄色のシルト層で、営まれた時期の差はほんの僅かなものではないかと考えられる。SD01・02・11の3条以外の溝は、この地域の条里型地割であるN 20° Eに沿っていると思われる。

出土遺物の数は少なく、内容的にみても須恵器・土師器の細片以外の遺物は出土していない。

SD01

調査区北東隅から調査区を斜めに横断する形で検出した。SD03～05・11を切り、SD06～10に切られている。幅は0.4m、検出面からの深さは0.03～0.05mである。

SD02

調査区東端のほぼ中央から調査区南西隅に向かって走る。2ヵ所で浅くなっているが、SD01とほぼ平行しており、SD03～05を切り、SD06～10に切られている。幅は0.4m、検出面からの深さは0.04～0.06mである。

SD03

調査区中央部付近で南北に走る。SD04・05とほぼ平行し、SD01・02に切られている。検出した幅は0.4～0.6m、検出面からの深さは0.06～0.08mである。

SD04

調査区中央部付近で南北に走る。SD03・05とほぼ平行し、SD01・02に切られている。浅くなっている1ヵ所でとぎれる。検出した幅は0.4～0.6mで、検出面からの深さは0.04～0.05mである。

SD05

調査区中央部付近で南北に走る。SD03・04とほぼ平行し、SD01・02に切られている。浅くなっている2

カ所でとぎれる。検出した幅は0.3～0.6mで、検出面からの深さは0.04～0.06mである。

SD06

SD05から東へ3m離れた場所で、SD03～05同様に南北に走る。SD01・02・11を切っている。検出した幅は0.5～1.2mで、検出面からの深さは0.06～0.1mである。幅や深さに変化が認められることから、ほぼ同じ場所で何度も掘り返されたのではないかと考えられる。

SD07

SD06から東へ約2.5m、SD08から西へ約3mの場所を南北に走る。SD01・02・11を切っている。検出した幅は0.6～1.1mで、検出面からの深さは0.06～0.08mである。幅や深さに変化が認められることから、ほぼ同じ場所で何度も掘り返されたのではないかと考えられる。

SD08

SD07から東へ約3m、SD08から西へ約3mの場所を南北に走る。SD01・02・11を切っている。検出した幅は0.4～1.1mで、検出面から深さは0.04～0.07mである。幅や深さに変化が認められることから、ほぼ同じ場所で何度も掘り返されたのではないかと考えられる。土師皿（55）が出土している。

SD09

SD08から東へ約3m、SD10から西へ約2.7mの場所を南北に走る。SD01・02・11を切っている。検出した幅は0.5～1mで、検出面からの深さは0.06～0.09mである。幅や深さに変化が認められることから、ほぼ同じ場所で何度も掘り返されたのではないかと考えられる。

SD10

SD09から東へ約2.7m、調査区東端から西へ約3mの場所を南北に走る。SD01・02・11を切っている。検出した幅は0.3～1mで、検出面からの深さは0.06～0.09mである。幅や深さに変化が認められることから、ほぼ同じ場所で何度も掘り返されたのではないかと考えられる。

SD11

調査区東北隅からSD01に重なるように走る。SD01・06～10に切られ、調査の区ほぼ中央で消失する。検出した幅は0.4m、検出面からの深さは0.03～0.05mである。

第2遺構面（図版2、巻首図版1、写真図版2）

この遺構面では竪穴住居、ピット、土坑、溝および土器溜まりを検出した。遺構の状況から考えて、かなりの削平を受けており、特に竪穴住居跡の遺存状況は悪い。同一の遺構面として調査は行ったが、営まれた遺構の時期は3時期にわたるものと考えている。

また、遺構の帰属時期の呼称については、玉津田中遺跡の調査成果を参考にし、庄内式併行期を弥生時代後期末、布留式併行期を古墳時代前期として記述している。

堅穴住居

SH01～06の6棟を検出したが、ほとんどが周壁溝のみの検出であり、住居跡に伴うと考えられる遺物の出土もほとんど認められなかった。SH01を切っているSK203やSH02～04を切っているSD206の時期が弥生時代後期末と考えられるので、住居群の時期は弥生時代後期後半に納まるのではないかと思われる。ただし、円形を呈すると思われるSH05のみはもう少し時期がさかのぼる可能性がある。

SH01（図版4、写真図版4）

調査区中央南端で検出した。一辺約5mの方形で、一部が調査区外に伸びる。SK203に周壁溝が切られている。

周壁溝は東辺以外の3辺が掘り直されている。幅は0.4m、検出面からの深さは0.08mで非常に残りが悪い。主柱穴は4基あり、その配置は一辺2.12mのほぼ正方形になる。柱穴の直径は0.4m前後、柱底の直径が0.18m前後、検出面からの深さは0.16～0.32mである。中央土坑があり、南北1.12m、東西1.08mの重んだ円形を呈している。

出土遺物としては、床面から台石（S3）が検出された。

SH02（図版4：写真図版3）

SD201の東側に位置し、SD206とSD208に北東・南東の隅を切られている。南北4.56m、東西4.4mの方形を呈する。周壁溝のみを検出し、主柱穴・中央土坑といった施設を確認することができなかった。周壁溝の幅は0.24m、検出面からの深さは0.05mである。また、出土遺物も認められなかった。

SH03（図版5：写真図版3）

SH02の北側に隣接して、SH04と重なるように検出した。南北4.8m、東西1.92m以上の方形を呈する。周壁溝のみを検出し、主柱穴・中央土坑といった施設を確認することができなかった。周壁溝の幅は0.32m、検出面からの深さは0.07mである。また、出土遺物も認められなかった。

SH04（図版5：写真図版3）

SD201の東側で、SH03と重なるように検出した。SD206・SH06に切られており、SK204・205と平面的に重複する。南北4.4m、東西5.44mの方形を呈する。周壁溝のみを検出し、主柱穴・中央土坑といった施設を確認することができなかった。周壁溝の幅は0.25m、検出面からの深さは0.06mである。また、出土遺物も認められなかった。

SH05（図版5：写真図版3）

調査区の北東隅近くで検出した。SB02・SD201と平面的に重複する。今回検出した中では唯一の円形を呈すると思われる住居で、直径が8m程度と考えられる。周壁溝のみを検出し、主柱穴・中央土坑といった施設を確認することができなかった。周壁溝の幅は0.15m、検出面からの深さは0.04mである。また、出土遺物も認められなかった。

SH06（図版6：写真図版3）

SH04・SD210を切り、SD203・209に切られている。南北4.4m、東西4.32mの方形を呈する。周壁溝のみを検出し、主柱穴・中央土坑といった施設を確認することができなかった。周壁溝の幅は0.32m、検出面からの深さは0.16mである。また、出土遺物も認められなかった。

掘立柱建物

堅穴住居の北側で2棟の掘立柱建物を検出した。遺物が出土していないので、帰属時期を決することはできないが堅穴住居よりも後出のものと考えている。また、掘立柱建物と認識した以外にも、いくつか柱穴が見つかっている。遺物が出土していないため、帰属時期は不明と言わざるを得ないが、一部の柱穴が堅穴住居を切っていることから、2棟の掘立柱建物と同じく、住居群よりは新しい時期のものと考えている。

SB01（図版6：写真図版4）

SD205の東、SK202の北に位置する。一部調査区外に伸びると思われる2間×2間以上の掘立柱建物である。梁間は3.84m、桁行3.92m以上を測る。柱穴の直径は0.24mで、検出面からの深さは0.08～0.16mである。柱穴から遺物は検出されていない。

SB02（図版6：写真図版4）

SH06の北側に位置し、一部SH05と平面的に重複する。1間×1軒の掘立柱建物で、規模は2.0×2.4mである。柱穴の直径は0.24mで、検出面からの深さは0.08～0.24mである。柱穴から遺物は検出されていない。

溝

主として、調査区東半分に集中して検出された。出土している遺物からみて、弥生時代後期末・古墳時代前期・古墳時代後期の3時期のものが混在している。南北に流れるものがほとんどを占めるが、例外的に東西方向に流れるものもある。

SD201（図版7、巻首図版2、写真図版3）

調査区東半の遺構集中地点のほぼ中央を南流する。SH05・SD202・SD205を切っている。幅1.6～2.3mで、検出面からの深さは1.6mを測る。上部0.7mに炭化物を含んだ黒褐色の縞砂・シルト層が堆積しており、光形品も含めた土器類はほとんどがこの層から出土している。

出土遺物には壺（1～10・30）・甕（11～19）・鉢（20）・高环（21～27）・脚台（28）・イイダコ甕（29）があり、細片のため図化はできなかったが製塙土器も僅かながら出土している。この溝が埋没した時期は古墳時代前期と考えられる。

SD202（図版7：写真図版3）

東西方向に走る溝である。SD201に切られており、検出長は約6.5m、幅0.42m、検出面からの深さ0.24mを測る。埋土は黄灰色～灰黄色のシルト～シルト混じり細砂で、遺物はほとんど出土していない。

SD203（図版8：写真図版3）

調査区東端を南北流する。SH06を切っている。幅0.35～0.95m、検出面からの深さは0.19mを測る。埋土は黄灰色の年質シルト～細砂混じり粘質シルトである。

出土遺物には須恵器环身（31）・高环蓋（32）・無蓋高环（33）がある。古墳時代後期に埋没したと考えられる。

SD204（図版8：写真図版3）

調査区東端を南北に走る。SD209を切り、調査区北東隅で肩部が曖昧になり、消失する。幅1.6m、検出面からの深さ0.12mを測る。埋土は黄灰色のシルト質極細砂である。

出土遺物には弥生土器の壺（34）、須恵器の环蓋（35）があり、埋没した時期は古墳時代後期と考えられる。

SD205（図版7：巻首図版2）

SD201に切られたL字形の溝である。埋土は黄灰色のシルト～粘質シルトである。

出土遺物には鉢（38～40）、高环（41）、器台（42）がある。埋没した時期は弥生時代後期末と考えられる。

SD206（図版8）

SH02～04を切って、南北に直線的に走る。検出長は約13m、幅0.4～0.85m、検出面からの深さは0.22mを測る。埋土は黄灰色のシルト～細砂混じり粘質シルトである。

出土遺物には壺（43・44）、甕（45～47）、鉢（48）、器台（49）と韓式系土器の壺（50）がある。埋没した時期は弥生時代後期末と考えられる。

SD207（図版7）

SD201の東側に位置する短い溝である。検出長は1.2m、幅0.2m、検出面からの深さは0.09mである。埋土は黄灰色シルトである。

SD208（図版7）

SD201の東側に位置する短い溝である。SH02を切っている。検出長は3.2m、幅0.5m、検出面からの深さは0.11mを測る。埋土は灰黄褐色極細砂である。

SD209（図版8）

SD203と204の間に位置し、SH06を切り、SD204に切られる。幅は0.75～1.2m、検出面からの深さは0.18mである。埋土は灰黄褐色細砂と褐色極細砂である。

出土遺物には須恵器环身（51）・甕（52）がある。埋没した時期は古墳時代後期と考えられる。

SD210（図版8）

SD203と209の間に位置し、SH06・SD204に切られる。検出長約4m、幅0.4m、検出面からの深さ

0.05mを測る。埋土は暗灰黄色粘質シルト混じり粗砂である。

SD211（図版10）

調査区西端に位置する。東西方向に走り、検出長は6.4m、幅0.25～0.4m、検出面からの深さ0.06mを測る。埋土は黄灰色粘質シルトである。

出土遺物には弥生時代後期末の鉢（53）がある。

SD212（図版10）

SD211の北側に位置する短い溝である。検出長は約4.2m、幅0.4～0.7m、検出面からの深さは0.08mである。埋土は黄灰色粘質シルトである。

SD213（図版9）

調査区の中央西寄りを北東から南西に縦断する。幅1.1～1.8m、検出面からの深さは0.12mを測る。埋土は暗灰黄色粘質シルトである。

出土遺物には弥生時代後期末の高壺（54）がある。

土坑

検出深度が0.4mを越えるしっかりした土坑（SK201・202・207）と0.1m前後の浅い土坑（SK204～206・208～210）が混在している。前者については出土遺物からみて古墳時代のものである可能性が高いが、浅いものは出土遺物がなく、帰属時期は不明である。

SK201（図版10：写真図版5）

SD202の北側に位置する。周囲に複数のピットがあるが、それらとの関係は不明である。平面形は東西1.08m、南北0.94mの歪んだ円形を呈する。検出面からの深さは0.48mを測る。下部には炭化物を含む層が堆積している。

出土遺物にはオリーブ灰色シルト層に包蔵されていた土師器の粗製小型丸底壺（58・59）がある。1個は遺構掘削の際に土と一緒に取り上げてしまったが、本来は土坑のほぼ中央に2個並べて置かれていたと思われる。古墳時代前期のものと思われる。

SK202（図版11）

SB01の南側に位置する。平面形は東西1.08m、南北1.16mの歪んだ円形を呈する。検出面からの深さは0.57mを測る。底には炭化物を含む層が堆積している。規模・堆積土ともSK201との共通性がみられるが、遺物が出土していないため所属時期は不明である。

SK203（図版11：写真図版5）

SH01の周壁溝を切っている。平面形は南北0.75m、東西0.83mの歪んだ隅丸方形を呈する。検出面からの深さは0.15～0.3mの二段掘状になっており、埋土は灰黄褐色極細砂層である。検出時の状況からSH01とは別の遺構と考えているが、SH01の住居内土坑である可能性も捨てがたい。

出土遺物には弥生土器の壺（61～63）があり、弥生時代後期末のものと考えられる。

SK204（図版12）

SH04と平面的に重複する。平面形は南北0.68m、東西0.8mの梢円形を呈する。検出面からの深さは0.14m、埋土は黄灰色粗砂・細砂混じりシルトである。遺物は検出されていない。

SK205（図版12）

SH04と平面的に重複し、SD206に切られている。残存部分は東西0.96m、南北0.7mの隅丸方形で、検出面からの深さは0.1m、埋土はSK204と同じく黄灰色粗砂・細砂混じりシルトである。遺物は検出されていない。

SK206（図版12）

調査区東端にあり、ほとんどの部分が調査区外にあると思われる。検出できたのは南北2.1m、東西2.6mの隅丸方形の一角で、検出面からの深さは0.12mである。埋土は黄灰色細砂混じりシルトである。

SK207（図版11：巻首図版2）

SH01とSD213の間に位置する。平面形は南北1.0m、東西0.69mの梢円形を呈する。検出面からの深さは0.48mで、埋土は上半に褐色～灰褐色細砂・極細砂が堆積し、下半は主として黒褐色のシルト～粘土が堆積している。

最下層から須恵器の环甌（60）が出土している。

SK208（図版12）

調査区の西端に位置する。大半が調査区外に存在すると思われる。検出できたのは、南北4.1m、東西0.7mの範囲で、検出面からの深さは0.1mである。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は黄灰色細砂混じりシルトである。

SK209（図版12）

SH01の西側に位置し、大半が調査区外に存在すると考えられる。検出できたのは南北0.4m、東西2.35mの範囲で、検出面からの深さは0.12mである。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は黄灰色粗砂混じり粘質シルトである。

土器溜まり

SX01（写真図版5）

調査区東端で検出した。溝状の遺構とも考えたが、最終的な平面プランは不明である。調査区東壁内も含め、南北1m、東西2mの範囲で完形に近い土器が集中して出土した。調査時は二つの遺構があると考えていたが、双方から出した土器で接合するものが多かったため、一つの土器溜まりと考えるにいたった。

弥生時代後期末の壺（64～72）、鉢（73・74）尚環（75・76）、器台（77・78）が出土している。

第3節 遺物

本節では、当遺跡出土遺物を最初に各遺構単位で記述し、その後で包含層出土の遺物にも触れる。なお、遺構の項でも記述したが、堅穴住居跡からはSH01で石器が1点出土している他は、遺物を検出することができなかったため、ここでは触れるのは下層遺構面の溝からの出土した遺物が主となる。

土器・土製品

遺構出土の土器

SD201出土土器（1～30：図版13～15、写真図版6～9）

1は細頸壺である。1は扁平な球形の胴部に細い頸部が付くと思われる。2～6は直口壺と考えている。2は丸みを帯びた体部に外反する口縁部が付く。壺と考えることもできるが、体部最大径に対して口縁径が小さいため壺とした。3は縱に長い楕円球形の体部に直線的に開く短い口縁部を持つ。4は球形の体部から覗く屈曲して外反気味に立ちあがる口縁部を持つ。口縁部は頸部直上で一度厚みを増し、稜を作れる。5は球形の体部から外側に少し開いて立ちあがる口縁部を持つ。6は球形の体部に口縁部は直立して立ちあがる口縁部を持ち、端部は外反して終わる。

7～9は小型丸底壺である。7は丸みを帯びた体部から大きく開く口縁を持つ。全体に歪んでいる。8はやや扁平な丸みを帯びた体部に直立して立ちあがる口縁部を持つ。9はやや歪んだ球形の体部から内輪気味に開く口縁を持つ。

11～19は甌である。11はやや長い体部に単純に外反する口縁部を持つ。口縁端部は部分的ではあるが内側に肥厚する。12は球形の体部から覗く屈曲して伸びる口縁部を持つ。口縁端部は丸く収める。13は球形の体部からやや緩く「く」の字状に折れる頸部を持ち、口縁部は斜め上方に開く。口縁部は厚みがあり、内側に折り返したような痕跡が残る。14は球形の体部に単純に外反する口縁が付く。16も丸みを帯びた体部に単純に外反する口縁が付く。17は球形の体部に単純に外反する口縁が付く。18は底部が僅かに突出した球形の体部を持ち、直立気味に立ちあがった口縁部は端部を外反させる。19は覗く屈曲した頸部から口縁部が直線的に開き、口縁端部を内側に肥厚させる。

20は浅い丸底の体部から大きく開く口縁部を持つ鉢である。

21から27は高杯である。21は浅い皿状の体部に大きく外反する口縁部が付く。口縁部と体部の境界には明瞭な段持つ。22も浅い皿状の体部に大きく外反する口縁部が付くが、口縁部と体部の段は不明瞭である。23は浅い碗状の杯部を持ち、低い位置で大きく開く握部を持つ。脚部内面には螺旋状に粘土紐を積み上げた痕跡が明瞭に認められる。24・25はやや深い椀状の杯部を持つ。24は屈曲せずに大きく開く握部を持ち、25は直線的に広がる脚柱部から屈曲して大きく開く握部を持つ。24の脚部内面にも螺旋状に粘土紐の跡が残る。26は25とほぼ同じ形態であるが、杯部の内底が半たくなっており、脚部内面に23・24と同じく螺旋状に積み上げた粘土紐の痕跡がある。27は平たい内底をもつ椀状の杯部に緩やかに開く脚部が付く。脚内面には23・24・26と同様に粘土紐の痕跡がある。

28は脚部である。短い中実の脚柱部を持つ。

29はイイダコ壺である。口縁直下に紐孔が一ヵ所残存しており、ナデで仕上げている。

10は溝が切り込まれていたベース面から出土した壺の頸部である。肩部に列点文と波状文を巡らせている。30は溝の上層から出土した広口壺の口縁部である。口縁は短く外反し、端部を肥厚させて一面に刻み目を施している。

また、細片のため図化はできなかったが、製壺七器も出土している。

10・30を除いて、古墳時代前期（布留式並行）の土器群であると考える。

SD203出土土器（31～33：図版15、写真図版9）

31は須恵器の坏身である。平底で深い体部を持ち、受部は水平に伸びる。立ち上がりは高く、肥厚した端部は内傾する。体部外面にヘラ記号がある。32は高环の蓋である。つまみは平坦で、中央に突起がある。天井部と立ち上がり部は明確に区別されるが、稜は低い。口縁端部は内傾する。33は無蓋高环の口縁部である。外反気味に開く口縁を持ち、2条の突帯とやや不明瞭な櫛描波状文を巡らせる。

陶邑編年のTK23～TK47型式に並行すると思われる。

SD204出土土器（34・35：図版15）

34は小さな底部とす詰まり体部を持ち、口縁部が直線的に開く小型の甕である。

35は須恵器の坏蓋である。平坦な天井部を持ち、天井部と立ち上がり部の境界には明瞭な稜がある。立ち上がり部は直立し、端部は内傾する。

34は弥生時代後期末、35はSD203の須恵器よりやや新しいと思われる。

SD205出土土器（36～42：図版16、写真図版9・10）

36は外反して開く口縁を持つ大型の甕である。37は倒卵形の体部に単純に外反する口縁部が付く甕である。

38は丸底の鉢である。39はカップ状の体部に短い脚台が付く。40は底部がやや突出し、体部にタタキを施す鉢である。

41は浅い皿状の坏部から口縁が大きく開く高环である。

42は二重口縁状の受部に直線的に開く脚部が付く器台である。底部にヘラ描き波状文を2条巡らせる。いわゆる「精製タイプの淡路型器台」である。

これらの土器は弥生時代後期末に属するものと考えられる。

SD206出土土器（43～50：図版16・17、写真図版9・10）

43は広口壺である。直立気味に伸びる頸部から口縁部は外反気味に大きく開く。口縁端部は上方に肥厚させ、外側に面を作る。そこに現状で2個一組の円形浮文が2ヶ所残存している。頸部と体部の境界には刻みを施した断面三角形の貼付突帯を巡らせている。44は斜めに開く頸部から、さらに大きく開く口縁部を持っていたと思われる。体部は大きく腰が張る。

45はやや小型の甕である。平底で倒卵形の体部から口縁部は外反して緩やかに開く。口肩部には刻み目を施している。46は胴の張った体部に外反する口縁が付く。頸部内面に粘土紐の痕跡が残る。47は倒卵形の体部に単純に外反する口縁が付く。体部のタタキは口縁部直下までおよぶ。

48は平底の底部から内彎気味に立ちあがる体部を持つ鉢である。摩滅が著しく調整は不明である。

49は大きく開いた二重口縁状の受け部を持ち、脚部がまっすぐ開く器台である。摩滅が著しく調整は不明だが、一部にヘラミガキが残っている。いわゆる「精製タイプの淡路型器台」である。

50は韓式土器の壺である。格子タタキを施した肩の張った体部から直立する頸部が伸び、口縁は外反

して聞く。胎土は他の土器と同じである。

これらの土器は弥生時代後期末に属するものと考えられる。

SD209出土土器（51・52：図版17、写真図版10）

51はやや浅い底部からほぼ水平に広がる受部を経て、立ち上がり部は外反気味に伸びる。縁部は内側に浅く傾斜し面を持つ。52は鶴の頸部と思われる。屈曲部の上下に櫛描波状文を巡らせ、内外面に自然釉が掛かる。

陶邑編年のTK47型式に併行するものと考えられる。

SD211出土土器（53：図版17）

53は鶴の振る体部から屈曲して聞く口縁部を持つ大型の躰である。

弥生時代後期末の土器と考えられる。

SD213出土土器（54：図版17）

54は浅い皿状の体部に外反して聞く口縁部が付く高环である。体部と口縁部の境界には突堤状の段がある。

弥生時代後期末の土器と考えられる。

SD08出土土器（55：図版17）

55は土師小皿である。体部は回転ナデ、底部は回転糸切り技法を用いている。

P206出土土器（56・57：図版17、写真図版10）

56は口縁端部を僅かに上下に肥厚させ、そこに2条の凹線を巡らせる弥生土器の甕である。

57は須恵器の环身である。平底でやや扁平な体部を持ち、受部は斜め上方に伸びる。立ち上がりは外反して高く、肥厚した端部は内傾する。

56は弥生時代後期、57は陶邑編年のTK23～TK47型式に併行するものと考えられる。

SK201出土土器（58・59：図版17、写真図版10）

58・59は形態をほぼ同じくする粗製の小型丸底甕である。全体にユビナデの痕跡がよく残り、球形の体部に直立する短い頸部が付く。

古墳時代前期の土器と考えられる。

SK203出土土器（61～63：図版18、写真図版11）

甕が3点出土している。61は口縁部を欠くが、倒卵形の体部にほとんど尖底状になった小さな平底を持つ。62は平底で倒卵形の体部に単純に聞く口縁が付く。口縁が波打っている。63は尖底気味の底部と倒卵形の体部を持ち、口縁部は単純に外反する。口縁端部は上方に拡張され、外側に面を持つ。

弥生時代後期末の土器と考えられる。

SX0207山土器（60：図版17、写真図版10）

60は須恵器の壺蓋である。平坦な天井部をもち、立ち上がり部との境界には明瞭な稜がある。口縁端部は内傾する。

陶邑編年のTK23～TK47型式に併行するものと考えられる。

SX01山土器（64～78：図版18・19、写真図版11・12）

64から72は壺である。64は「く」字状に屈曲した頸部から直線的に伸びる口縁部を持つ。口唇部に刻み目を施す。65は単純に外反して開く口縁部を持つ。66は平底で寸詰まりな倒卵形の体部に単純に外反する口縁部を持つ。67はしっかりとした平底に倒卵形の体部を持ち、口縁は単純に外反する。端部を上方に拡張して外側に面を持つ。68は胴の張った体部に鋭く屈曲して直線的に開く口縁部が付く。体部が歪んでいる。69は少し小型の底部に丸みを帯びた胴部で、緩やかに外反する口縁部を持つ。70は小型化した底部と丸みを帯びた体部に鋭く屈曲して開く口縁部が付く。71は突出した平底に扁平な球形の体部を持ち、口縁は単純に外反する。72は突出した平底を持ち、内彎気味に立ちあがる体部からほとんど屈曲することのない頸部を経て内彎気味に開く口縁部を持つ。口唇部には刻み目を施している。

73は平底から内彎気味に立ちあがる体部を持つ。74は小さな平底から内彎気味に立ちあがる体部を持つ鉢である。

75は浅い体部に大きく開く口縁部が付く高环の壺部である。体部と口縁部の境界には明瞭な稜線があり、その直上に3条一組の櫛描波状文を巡らせる。76は屈曲して開く浅い鉢形の壺部を持ち、短い中実の脚柱部から大きく開く裾部をもつ高环である。

77はタタキの後ナデを施した直線的に伸びる器台の受部である。78は受部、脚部とも直線的にのびる器台で、全面にタタキを施す。77・78ともいわゆる「粗製の淡路型器台」である。

これらは弥生時代後期末の土器と考えられる。

包含層出土の土器・土製品

包含層出土の土器・土製品は、遺構出土のものと内容的・時期的な違いはない。ただし、遺構からは出土していない律令期の須恵器が極少量ではあるが認められる。以下、弥生土器・土師器と須恵器に分け、器種ごとに概要を述べる。

壺（79～83：図版20、写真図版13）

79は二重口縁壺である。内傾気味に立ちあがる頸部から屈曲して開く口縁部を持つ。80は二重口縁壺の頸部であると考えられる。頸部と体部の境界に刻み目を施した断面三角形の貼付突帯を巡らせる。81は外反して開く口縁部を持つ壺である。口縁端部は僅かに拡張して外側に面を持つ。82・83は丸い体部に直立した短い口縁の付く短頸壺である。

壺（84～93：図版20・21、写真図版13）

84は平底と倒卵形の体部を持つやや小型の壺である。85は平底と胴の張り出しのない体部を持つ。87はやや潰れた倒卵形の体部に単純に外反して開く口縁部を持つ。底部はすぼまって小型化している。88は倒卵形の体部から単純に外反して開く口縁部を持つ。底部は失われているが、体部のすぼまりからみて小型化傾向を見せ始めている。90は尖底気味の小さな平底を持ち、高さに比して胴の張る体部に外反

する口縁が付く。91・92は単純に外反する口縁部を持つ。口縁端部は外側に面を作る。93は尖底気味の平底と球制化した体部を持ち、鋭く屈曲した頸部から口縁部が直線的に伸びる。

鉢（94・95：図版21、写真図版13）

94は丸底で内彎気味に立ちあがる体部を持ち、口縁部が僅かに外反して開く鉢である。95は低い脚台から内彎気味に立ちあがる体部と屈曲して開く口縁部を持つ小型の鉢である。

高杯（96：図版21、写真図版13）

96は浅い楕形の坏部を持つ高杯である。内外面ともハケを施している。

器台（97：図版21、写真図版13）

97は二重口縁状の受部を持つと考えられる器台である。外面には丁寧なヘラミガキが施されている。残存状況は悪いものの「精製の淡路型器台」と考えられる。

土錐（98：図版21、写真図版13）

98は土師質の大形土錐である。やや歪んだ円柱状の外観を有し、中央に径1.4cmの円孔が貫通している。

須恵器坏（99～105：図版21、写真図版14）

99～102は須恵器の坏蓋である。99・100の立ち上がりは直立し、天井部との境界に明瞭な隆帯を持つ。98の隆帯は垂下気味である。口縁端部は内側に明瞭な段を持つ。天井部は丸みを帯び、約3/4にケズリを施す。101は立ち上がりが少し開き気味で、天井部との境界には明瞭な隆帯がある。口縁端部は内側に段を持つ。102は平坦な頂部から丸みを帯びて広がる天井部を持ち、天井部と立ち上がり部の境界には隆帯がある。

103～105は須恵器の坏身である。103は平底と長い立ち上がり部を持つ。104は水平に伸びる受部を持ち、立ち上がり部は直線的である。口縁端部は内傾し、微かにくぼんでいる。105は丸みを帯びた浅い底部を持ち、受部は水平に伸びる。立ち上がり部は斜めに伸び、端部は僅かに内傾する。

須恵器高坏（106～109：図版21、写真図版14）

106は高坏の蓋である。天井部だけ残存する。107・108は有蓋高坏である。107は明瞭な受部から外反気味に伸びる立ち上がり部を持ち、口縁端部は内側に面を持つ。低い脚台部は3ヶ所に円形のスカシ穴をうがち、端部を拡張して外側に面を作る。108は口縁端部が内傾し、僅かにくぼむ。脚部には3方向から円形のスカシを穿ち、脚端は鋭く屈曲してやや内向きにおさめる。109は無蓋高坏で、坏部の口縁は強く外反する。外面に2条の突帯と櫛拂波状文を巡らせ、耳の付いていた痕跡が1ヶ所ある。脚部は失われているが、底部外面に長方形スカシの痕跡が4ヶ所残る。

110は脚部にカキ目を施し、推定3ヶ所の長方形スカシをうがつ。脚端部は鋭く屈曲して直角に伸び、外側に面を持つ。

須恵器蓋（111：図版20）

111は平らな天井部をもち、水平に伸びた口縁端部を僅かに垂下させる。律令期のものと考えられる。

須恵器鹿頭部（112：第3図：巻首図版2、写真図版15）

112は須恵質の鹿頭部である。目と鼻はヘラの刺突で表現し、口はヘラ書きである。牡鹿を表現したもので、枝角を持ち、剥落しているものの耳が付いていた痕跡がある。角の間には自然軸が掛かる。鼻先から首後ろまで4.3cm、角も含めた残存高は4.75cmを測る。装飾付須恵器の小像部分と考えられる。中世遺構面からの出土であり、包含層出土須恵器の中にも接合するものや装飾付須恵器と考えられる破片が認められなかった。

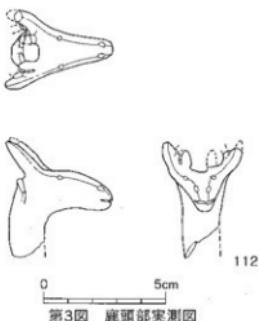
石器（第4図、写真図版15）

遺構出土のものと包含層出土のものがあるが、点数も少ないためここで一括して記述する。

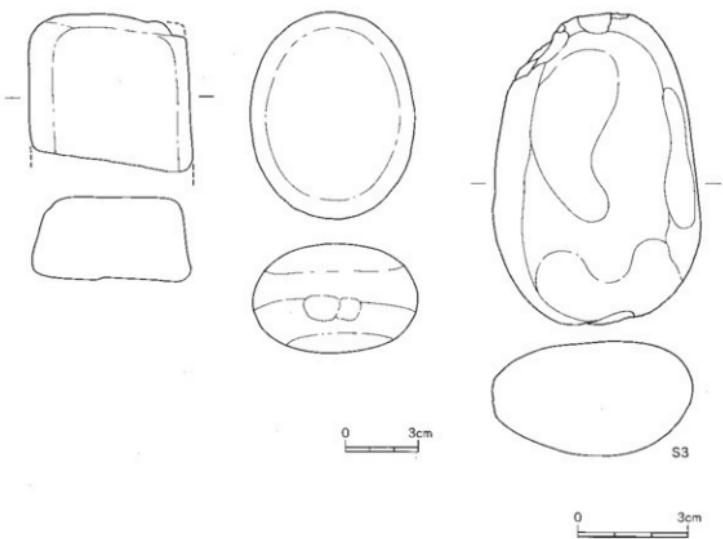
S1は亜角礫を用いた砾石器である。平坦面が摩滅しており、磨石あるいは砥石状の用途に用いたのではないかと思われる。上面から側面にかけて赤色の付着物がある。重量は233.7gを測る。なお、この付着物については化学分析の結果、顔料の可能性は低いことが判明した。

S2は亜円礫を用いた磨石である。一方の端に敲打痕が認められるほか、全体に磨かれている。重量は422.7gを測る。SD206から出土した。

S3はSH01の床面からが出土している。大型の扁平な亜円礫を用いた砾石器で、両端が剥離している。台石と考えられる。重量は2560gを測る。



第3図 鹿頭部実測図



第4図 石器・石製品実測図

吉田南遺跡出土土器・土製品観察表

()は量産品

番号	型名	種類	縦(cm)	横(cm)	厚さ(cm)	内面	外側	備考	断面概要		目録	出 手	現存品	備考
									外側	内側				
1	SD001	上鋤器	鋤器		(19.8)				外側上面は大きなハケ面、内面にはハケらず。内面はコナド、ビザサの痕跡有り。外側に鋸歯。	10YR8/0	チャート、白石、右 左側に鋸歯、右 側に鋸歯	手作業8/4		
2	SD004	上鋤器	鋤器	(15.6)					口縁部コナド。外側は研ぎ面、内面はハケらず。ハケなし。	10YR5/0 7.5YR5/0	チャート、白石、右 左側に鋸歯、右 側に鋸歯	山被第1/4 -山被第1/5		
3	SD001	土削器	直口壺	15	27.2	38.6	1.保持コナド。伴作共蓋はハケ。内面に壷底のため調整不良。	GTR1/4	反対、右肩、テ ーパー、軽い鋸歯 -2mm	光沢				
4	SD001	上鋤器	鋤器	(11.8)	(16.35)	18.2	1.保持コナド。伴作共蓋はハケ。内面に壷底のため調整不良。	2.5YR7/0	チャート、白石、右 左側に鋸歯、右 側に鋸歯	利川5/3				
5	SD001	土削器	直口壺	11.6	-17.8		口縁部コナド。内面にハケが残る。体部形状はハケ。内面はコナド。半身部に大小の凹凸、壷底に鋸歯有り。	10YR7/0	美濃、右肩、テ ーパー、左側に鋸歯 -3mm	口縫留1/0 -ほば形	二次焼成			
6	SD001	上鋤器	鋤器	12.15	16.8	18.75	1.保持コナド。内面にハケが残る。体部形状はハケ。内面はコナド。半身部に大小の凹凸、壷底に鋸歯有り。	10YR7/0	美濃、右肩、テ ーパー、左側に鋸歯 -3mm	利川5/3				
7	SD003	土削器	小口壺	8.4	7.5		1.縁部は白コロナド。体部表面にテグス、内面はナカダ。	3.4YR7/0 GTR1/4	反対、右肩、テ ーパー、左側に鋸歯 -0.5-1mm	利川5/4				
8	SD001	土削器	小口壺	(6.86)	8.9	7.8	内面はナカダ。内面はL字縫合部は研ぎ面?。外側はビザサ。内面はコナド。体部表面に粒状の凹凸有り。	2.5YR7/0	口縫留1/0 -体部は成形 物。					
9	SD001	上鋤器	小口壺	(10)	9.1	7.85	1.保持コナド。体部形状はハケ。内面はコナド。ハケなし。	10YR7/0	チャート、白石、右 左側に鋸歯、右 側に鋸歯	山被第1/3 -山被第1/4 -山被第1/5				
10	SD001	多生上鋤	鋤				外側にはハケが残る。粗面に拘り穴と放状文を施わせる。	2.5YR7/0	右肩、右肩ひびき、 粗面5-10mm	葉葉付E1/2				
11	SD001	土削器	壺	(16.4)			1.縁部は白コロナド。体部表面はハケ、内面はナカダ。内面には土手足の細い跡が残る。	10YR7/0	チャート、右肩、右 左側に鋸歯、右 側に鋸歯	利川5/4				
12	SD001	土削器	壺	13.3	16.3	16.4	1.縁部はナカダ。外側表面はハケ、内面はエヌイサク-板ナカダ。内面には土手足の細い跡が残る。	2.5YR7/0	チャート、右肩、右 左側に鋸歯、右 側に鋸歯	二次焼成				
13	SD001	土削器	壺	10.95	14.9	15.4	1.縁部はナカダ。一部ハケが残る。体部表面は平滑cmのところは、下にはないナカダとナカダ。内面はユビサスの板ナカダ。内面には土手足の細い跡が残る。	10YR3/0 4/0	右肩、右肩ひびき、 粗面5-10mm	利川5/4				
14	SD001	土削器	壺	13.9	26.5	21.7	口縁部コナド。体部外側はナカダ。内面は不平。外側に周囲丸み付。	2.5YR7/0	チャート、右肩、右 左側に鋸歯、右 側に鋸歯	山被第1/2 -体部全体に 粗面				
15	SD001	土削器	壺	(12.9)			口縁部コナド。一部ハケが残る。内面はユビサスの板ナカダ。	2.5YR7/0	右肩、右肩ひびき、 粗面5-10mm	山被第1/3				
16	SD001	土削器	壺	(13.4)			口縁部コナド。外側表面はナカダ。内面はハケナリ。	2.5YR7/0	右肩、右肩ひびき、 粗面5-10mm	口縫留7/8 -口縫留7/9				
17	SD001	上鋤器	鋤	14.95	21.5		口縁部コナド。外側表面は粗面に不規則凹凸不平。内面はナカダ。ナカダにはヤマト文と呼ぶ跡がある。	SD001/0 2.5YR7/0	右肩、右肩ひびき、 粗面5-10mm	口縫留2/3 -山被第1/2				
18	SD001	土削器	壺	13.7	18.4	19.2	1.縁部はL字のコロナド。外側表面はナカダ。内面に凹凸。内面の内側には加工跡に残る凹凸、底面有り。	10YR3/0 5/0	右肩、右肩ひびき、 粗面5-10mm	山被第1/0 -外側にスス 付。				
19	SD001	土削器	壺	(13.7)			口縁部コナド。一部ハケが残る。内面はナカダ。	10YR3/0	右肩、右肩ひびき、 粗面5-10mm	1.山被第1/7 -山被第1/8				
20	SD001	上鋤器	鋤	(15.4)	(5.5)		口縁部コナド。外側表面はナカダ。内面はハケナリ。	10YR3/0 4/0	右肩、右肩ひびき、 粗面5-10mm	利川5/6				
21	SD001	土削器	壺	(21.2)			口縁部はコナド。外側表面はナカダ。内面はハケナリ。	2.5YR7/0 GTR1/4	右肩、右肩ひびき、 粗面5-10mm	环颈5/4				
22	SD001	土削器	壺	15	(9.75)	12.35	1.内面に土と剥離。試験で割裂して調査不平。調査に3方向から円形孔を穿つ。	10YR3/0	右肩、右肩ひびき、 粗面5-10mm	利川5/5				
23	SD001	土削器	壺	(17.6)	(11.85)	18.1	1.縁部はコロナド。外側表面はナカダ。内面はハケナリ。内面には凹凸。内面の内側には加工跡に残る凹凸、底面有り。	10YR3/0 4/0	右肩、右肩ひびき、 粗面5-10mm	口縫留1/1 -山被第1/2				
24	SD001	上鋤器	鋤	17.4		18.1	口縁部はコナド。外側表面はナカダ。内面はハケナリ。	10YR3/0 4/0	右肩、右肩ひびき、 粗面5-10mm	口縫留2/3 -山被第1/2				
25	SD001	上鋤器	鋤	(16.6)	(10.1)	12.6	口縁部コナド。外側表面はナカダ。内面はハケナリ。内面にはハケナリ。底面はコロナド。	10YR3/0	右肩、右肩ひびき、 粗面5-10mm	口縫留1/2 -山被第1/2				
26	SD001	土削器	壺	(17.2)	(18.05)	13.6	口縁部コナド。外側表面はナカダ。内面はハケナリ。内面にはハケナリ。底面はコロナド。	2.5YR7/0	右肩、右肩ひびき、 粗面5-10mm	口縫留3/4 -山被第1/2				
27	SD001	土削器	壺	15.4	(11.85)	12.5	口縁部コナド。外側表面はナカダ。内面はハケナリ。内面には凹凸。内面の内側には剥離状態で底面を保有する。	2.5YR7/0 GTR1/4	右肩、右肩ひびき、 粗面5-10mm	利川5/5				
28	SD001	上鋤器	鋤				外側にはハケナリ。内面にはハケナリの痕跡がある。	2.5YR7/0 GTR1/4	右肩、右肩ひびき、 粗面5-10mm	环颈5/4				
29	SD001	土削器	たこ壺	(4.2)		8.9	外側には工具柄とと思われる跡や多段鉄輪。内面にはナカダ。	2.5YR7/0	右肩、右肩ひびき、 粗面5-10mm	利川5/3				
30	SD001	土削器	壺	12.05			壺底のため調査不平。口縁部に多段の凹凸を有す。	10YR3/0 4/0	右肩、右肩ひびき、 粗面5-10mm	利川5/4				
31	SD003	直筒器	直筒	10.8	13.0	9.3	内面にも剥離状態に凹凸。内面にはハケナリ。内面にはハケナリ。内面にはナカダ。	10YR3/0 4/0	右肩、右肩ひびき、 粗面5-10mm	利川5/4				
32	SD001	直筒器	直筒	(12.8)			1.縁部はコロナド。外側表面はナカダ。内面はハケナリ。内面にはナカダ。	10YR3/0 4/0	右肩、右肩ひびき、 粗面5-10mm	利川5/4				
33	SD003	直筒器	直筒	(16.3)			内面にはハケナリ。内面にはナカダ。	NR4/0-5/0	底面はSquash下	利川5/5				
34	SD004	刮土器	丈	(15)	(13.7)	2.7	14.4	外側表面はカキの痕跡が長く、内面は通水から凹凸にナカダ。钻孔の跡がある。	10YR3/0 4/0	右肩、右肩ひびき、 粗面5-10mm	利川5/4		一次焼成	
35	SD004	刮土器	丈				4.65	外側表面はカキの痕跡が長く、内面は通水からナカダ。	2.5YR7/0	右肩、右肩ひびき、 粗面5-10mm	利川5/4		一次焼成	
36	SD005	土削器	直筒		25.8		1.縁部はコロナド。外側表面はナカダ。内面はハケナリ。内面にはナカダ。	10YR3/0 4/0	右肩、右肩ひびき、 粗面5-10mm	利川5/0		内面にスス付		
37	SD005	土削器	直筒				1.縁部はコロナド。外側表面はナカダの後ナ。内面はハケナリ。	GYR7/4	右肩、右肩ひびき、 粗面5-10mm	1/5				

地番	行号	種別	基面	高さ(cm)	幅さ(cm)	底面(cm)	側面(cm)	形状(寸)	色	施工	現状	備考
38	SX0205	等土地	坪	10.1			5.2	内面部と計健・泰誠が署して蓋板不外、外間に露面。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
39	SX0206	等土地	台付坪	(7.25)	(8.15)	4	7.3	口縁部ヨコナタ、底部外側はタキナ、内面は不明。脚部横内側はヨビナ、外側はハナナ。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
40	SX0206	等土地	坪				4.15	脚部外側ヨコタキ、底部内側はユビナ。脚部内側はタキナ。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
41	SX0206	等土地	山坪	20.9				脚部外側には柱子、坪底部内側にはハナナ。脚部は液漏れで	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
42	SX0206	等土地	階段	19.9				等土地ヨコナタ、底部外側はタキナ、内面は不明。脚部横内側はヨビナ、外側はハナナ。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
43	SX0206	等土地	店舗	15.7				1階部ヨコタキ、2階部内側はタキナ。内面は不明。脚部横内側はヨビナ、外側はハナナ。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
44	SX0206	等土地	店	(37)				脚部外側はハナナ。各部外側はタキナの堅密な壁。脚部内側はヨビナの堅密な壁。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
45	SX0206	等土地	屋	(10.75)	(15)		17.8	等土地ヨコタキ、底部外側はタキナ。内面は不明。脚部横内側はヨビナの堅密な壁。各部外側はタキナの堅密な壁。内面は不明。脚部横内側はヨビナの堅密な壁。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
46	SX0206	等土地	間	(16.2)	(17.8)	4.6		脚部外側はタキナ、内面はハナナ。内面の堅密な壁下に土台脚が見え、内面はハナナ。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
47	SX0206	等土地	窓	(16.5)	(18.85)	(23.3)		口縁部はナダ、中段に凹凸が署して内側体外側はタキナ、内面はハナナ。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
48	SX0206	等土地	加	(12.6)		4.7	6.6	内面と外壁のため蓋板不外、内側底部内側はハナナ。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
49	SX0206	等土地	踏台	(20.6)		4		等土地ヨコタキ、脚部外側はハナナ。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
50	SX0206	等土地	庇	16.2				口縁部ヨコタキ、底部外側にはヨビナを残す。内面はハナナ。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
51	SX0206	等土地	庇	(10.3)	(12.4)	(4.8)		内面はハナナ。内面はハナナ。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
52	SX0206	等土地	はそう					同上。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
53	SX0211	土 壁	壁	(26)				内面を整地するため、脚部調節装置、1級傾斜内の傾度方向のヘラクス	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
54	SX0213	土 壁	山坪	(17.3)				内面と外壁の間が広く、脚部不平。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
55	SX028	土 壁	小屋	(7.2)	(8)		1	脚部はヨコタキ、底部内側はヨビナ。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
56	P204	等土地	壁	(18)				1階部ヨコタキ。2階部外側はハナナを残す。内面はハナナ。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
57	P206	等 地	外壁	(10.76)	(12.9)	(8.1)	(5)	内側から体外外側にかけて内側タキ、外側はヨビナの堅密な壁。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
58	SX0201	等土地	小屋丸太土壁	5.15	6.6	5		1脚部はタキ、底部に手づる成形。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
59	SX0201	J. 壁	小屋丸太土壁	(4.7)	8.8			背面はヨビナ。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
60	SX0207	瓦屋	平屋	12.3		4.5		平屋に壁へたつ式で、脚部外側はヨビナ。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
61	SX0203	等土地	窓	14.8	18.3	5.4	25.1	内側からヨビナ。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
62	SX0203	等土地	壁	(15)	(19.6)	(21.1)		口縁部ヨコタキ。底部内面はトボがヨビナ。下段がタキの復元ササ。脚部外辺迄ハケが残る。内面はハナナ。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
63	SX0203	等土地	壁					同上。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
64	SX0203	等土地	壁	(16.6)				口縁部はナダ。1階部に脚部を高めに高め。内側はヨビナ。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
65	SX0203	等土地	壁	(14.2)				口縁部ヨコタキ。体外外壁にタキ、内面はナダ。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
66	SX0203	等土地	壁	12.3	12.3	3.65	12.8	口縁部ヨコタキ。内側はヨビナ。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
67	SX0203	等土地	壁	11.5	14.1	4.1	16.8	脚部外壁はタキの後ヨコタキ。体外外壁はタキ、内面はナダ。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
68	SX0203	等土地	壁	(15.7)	20.7	4.6	24.1	1脚部ヨコタキ。体外外壁はタキを脚部半央にナダ。内面はヨビナ。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
69	SX0203	等土地	壁	(15.4)	(22)	3.9	24.5	1脚部ヨコタキ。体外外壁はタキ一部にナダ。体外内側はヨビナ。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
70	SX0203	等土地	窓	(14.9)	29.3	4.2	22.16	口縁部ヨコタキ。体外外壁はタキの後に高いタキ。内面はヨビナ。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
71	SX0203	等土地	窓	20.3	22.1	4.7	19.3	口縁部ヨコタキ。体外外壁はタキ、内面はナダ。内面底面にアシの痕跡がある。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
72	SX0203	等土地	窓	18.5		4	15.9	内側ヨコタキ。内面はハナナ。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
73	SX0203	等土地	窓	17.9		4.7	8.3	内側ヨコタキ。内面はハナナ。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
74	SX0203	等土地	壁	18.3		3.35	9.1	口縁部ヨコタキ。体外外壁はタキの左ナダ。内面はナダ。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
75	SX0203	等土地	窓坪	(15.7)				壁部が署して蓋板不外。口縁部と体外との接縫に左ナダの痕跡がある。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
76	SX0203	等土地	窓	12.55		(9.85)	9.05	内側ヨコタキ。内面はハナナ。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
77	SX0203	等土地	窗台	(15.8)				内側ヨコタキをナダ。内面はナダ。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	
78	SX0203	等土地	窗台	14.9		(15.4)	11.9	内面は企画のタキを施し、内面にナダを設す。内面内側には墨書きで秋田の候跡を残す。	白色、青色、オレンジ	柱、梁、柱上部、梁下部	既存完	

番号	車種	機器	基準	寸法(cm)	対応(cm)	対応(cm)	対応(cm)	前面側面に際して		角	曲率	形状	既存地	現地
								前面	側面					
79	後輪駆 売上車	空	16.4					1)横付足は厚底が長い調整不良、外側外面はへくらぎ、内面は凹凸。	1)YV78/2 2)YV78/2	テーパー、直角等 カット等を含む。	凸角等	凸角等	既存地	現地
80	荷台駆 売上車	空						運転室付は右側扉ナット部に錆斑の原因に断面三角形の外見で封緘を施す。外側外面はヘクラン等はナシ、内面はナシ。	1)YV78/2	錆斑、吸音、黒化等 ナシ含む。後部	錆斑等/S J-1mm	錆斑等	既存地	現地
81	荷台駆 低仕上車	広口直	14.2					内外別と車高の誤認の原因不規。	SYR7-00 7/3	内面、松葉等S J-1mm	内面	内面	既存地	現地
82	荷台駆 上昇車	増加面	(9.1)	(10.6)				凸筋部コナゲ、底は厚底が薄く調整不良。	7.2Y160/2	テーパー、直角等 カット等を含む。	山錆跡等-体 記号4	山錆跡等-体 記号4	既存地	現地
83	荷台駆 土業車	切削直	(9.1)	(10.4)				山錆部コナゲ、底は厚底が薄く錆斑不明。	内面S/35W/1 内面S/35W/1	丸石、石英、チャ ーJ-1mm	J-1mm	丸石、石英、チャ ーJ-1mm	既存地	現地
84	後輪駆 低仕上車	空	(11.3)	(13.6)	4.5	15.35	内面別と厚底が薄く錆斑不良。	1)YV78/2 2)YV78/2	丸石、石英、チャ ーJ-1mm	丸石、石英、チャ ーJ-1mm	丸石、石英、チャ ーJ-1mm	既存地	現地	
85	荷台駆 低仕上車	空	(14.7)	4.6				側部面面リム等、内面底点ナギ。	1)YV78/2 2)YV78/2	丸まり、君島等S J-2mm	丸まり、君島等S J-2mm	丸まり、君島等S J-2mm	既存地	現地
86	荷台駆 低仕上車	空	(14.1)	4				側面外側はナギ、内面底点ナギ。	1)YV78/2 2)YV78/2	丸まり、君島等S J-2mm	年年1/4~ J-3mm	年年1/4~ J-3mm	既存地	現地
87	荷台駆 低仕上車	空	(14.6)	(18.2)	3.3	20.95	1)横付足はナギ、外側外面はナギの後一部にハケナチ等、内面は底点ナギでナギ付等しているが、内面はナギ。	2.5SY160/2	テーパー、直角等 カット等を含む。	2/6				
88	荷台駆 低仕上車	空	(15.6)	(19.0)			1)横付足コナゲ、外側外面は底点ナギの他、側面へタグリ等、内面は厚底が薄く錆斑不規だが、外側外付に厚底三面ガタ有り。	内面S/35W/1 内面S/35W/1	丸石、石英、チャ ーJ-1mm	錆斑少し、 J-1mm	錆斑少し、 J-1mm	既存地	現地	
89	後輪駆 低仕上車	空	(13.4)	(16.7)	2.1	17.8	1)縦付足コナゲ、外側外付にナギの後側面付近はナギ、内面は底点ナギでナギ付等しているが、内面はナギ。	1)YV78/2 2)YV78/2 内面S/35W/1	丸石、石英等S J-1mm	丸石、石英等S J-1mm	丸石、石英等S J-1mm	既存地	既存地	
90	自走型 低仕上車	空	(15.4)	(14.7)	1.85	17.9	内面付足コナゲ、外側外付はナギの後側ナギ、内面は底点ナギでナギ付等しているが、内面はナギ。	1)YV78/2 2)YV78/2 内面S/35W/1	丸石、石英等S J-1mm	丸石、石英等S J-1mm	丸石、石英等S J-1mm	既存地	既存地	
91	荷台駆 低仕上車	空	(10.75)				内面付足コナゲ、外側外付はナギの後側ナギ、内面は底点ナギでナギ付等しているが、内面はナギ。	1)YV78/2 2)YV78/2 内面S/35W/1	丸石、石英等S J-1mm	丸石、石英等S J-1mm	丸石、石英等S J-1mm	既存地	既存地	
92	荷台駆 低仕上車	空	(16.3)				側部面コナゲ、側部外付はナギの後側ナギ、側面へタグリ等、内面は厚底が薄く錆斑不規。	1)YV78/2 2)YV78/2 内面S/35W/1	丸石、石英、チャ ーJ-1mm	丸石、石英、チャ ーJ-1mm	丸石、石英、チャ ーJ-1mm	既存地	既存地	
93	荷台駆 土作車	空	(15.2)				側部面コナゲ、側部内面はナギ。	1)SYR7-00 2)SYR7-00 内面S/35W/1	丸石、石英等S J-1mm	丸石、石英等S J-1mm	丸石、石英等S J-1mm	既存地	既存地	
94	荷台駆 上昇車	鉄	(18.2)		8		内面別と底点が薄く錆斑不規。	1)YV78/2 2)YV78/2 内面S/35W/1	丸石、石英等S J-1mm	丸石、石英等S J-1mm	丸石、石英等S J-1mm	既存地	既存地	
95	荷台駆 土作車	鉄	15		3.75	8	内面別と底点が薄く錆斑不規。	1)YV78/2 2)YV78/2 内面S/35W/1	丸石、石英等S J-1mm	丸石、石英等S J-1mm	丸石、石英等S J-1mm	既存地	既存地	
96	荷台駆 土作車	鉄	16.4				1)縦付足コナゲ、側部外付はナギ。	1)YV78/2 2)YV78/2 内面S/35W/1	丸石、石英等S J-0.5mm	丸石、石英等S J-0.5mm	丸石、石英等S J-0.5mm	既存地	既存地	
97	荷台駆 低仕上車	鉄台					側部外付はナギ、内面はナギ、脚部外付西面へクラン等、内面東面へクラン等。	2.5SY7/2	丸石、石英等S J-0.5~2.5mm	萬能のみ	萬能型骨 A?	既存地	既存地	
98	荷台駆 土作車	土箱	4.1~4.9			10.7	ナギ、特に底点のようものがみられる。	2.5SY7/2	丸石、石英等S J-0.5~2.5mm	丸石、石英等S J-0.5~2.5mm	丸石、石英等S J-0.5~2.5mm	既存地	既存地	
99	荷台駆 荷台車	空	11.75			4.7	天井部は脚部へタグリ、他の内面ナギ。	NNA/0	板幅3mm以下 内面S/35W/1	板幅3mm以下 内面S/35W/1	板幅3mm以下 内面S/35W/1	既存地	既存地	
100	荷台駆 荷台車	空	(11.85)			4.75	天井部は脚部へタグリ、他の内面ナギ。	NNA/0	板幅3mm以下 内面S/35W/1	板幅3mm以下 内面S/35W/1	板幅3mm以下 内面S/35W/1	既存地	既存地	
101	荷台駆 荷台車	空	(12.4)			4.6	天井部は脚部へタグリ、他の内面ナギ。	NNA/0	板幅3mm以下 内面S/35W/1	板幅3mm以下 内面S/35W/1	板幅3mm以下 内面S/35W/1	既存地	既存地	
102	荷台駆 土作車	空	(12.8)				天井部の2/3は内面に脚部へタグリ、他の内面ナギ。	NNA/0	板幅3mm以下 内面S/35W/1	板幅3mm以下 内面S/35W/1	板幅3mm以下 内面S/35W/1	既存地	既存地	
103	荷台駆 土作車	空	(10.4)	(12.6)	(6.9)	5.1	平底から厚底にありあり、受圧は左方に広がる。立ち上げ部は底点にナギがあり、内面は内面S/35W/1。	N7/0~6.6	板幅5mm以下 内面S/35W/1	板幅5mm以下 内面S/35W/1	板幅5mm以下 内面S/35W/1	既存地	既存地	
104	荷台駆 荷台車	空	(11.6)	(14)			内面から天井部下までが内面ナギ、内面外付は脚部へタグリ。	N7/0	板幅3mm以下 内面S/35W/1	板幅3mm以下 内面S/35W/1	板幅3mm以下 内面S/35W/1	既存地	既存地	
105	荷台駆 荷台車	舟	12.65	18.6	4.75		内面から天井部下までが内面ナギ、内面外付は脚部へタグリ。	NNA/0~6.6	板幅3mm以下 内面S/35W/1	板幅3mm以下 内面S/35W/1	板幅3mm以下 内面S/35W/1	既存地	既存地	
106	荷台駆 荷台車	高床車					天井部は脚部へタグリ、ある所をナギで付けて、他の内面ナギ。	N7/0	板幅3mm以下 内面S/35W/1	板幅3mm以下 内面S/35W/1	板幅3mm以下 内面S/35W/1	既存地	既存地	
107	荷台駆 荷台車	高床車	(10.8)		(8.75)	8.5	脚部内面から外付にかけては内面ナギ、内面外付は脚部へタグリ、内面中位に薄青色が濃くなり、その間に錆斑濃度供給不足の傾向がある。	NNA/0	板幅3mm以下 内面S/35W/1	板幅3mm以下 内面S/35W/1	板幅3mm以下 内面S/35W/1	既存地	既存地	
108	荷台駆 荷台車	高床車	(10)	(19.0)	9.1	8.8	内面から天井部下までが内面ナギ、内面外付は脚部へタグリ。	N7/0~6.6	板幅3mm以下 内面S/35W/1	板幅3mm以下 内面S/35W/1	板幅3mm以下 内面S/35W/1	既存地	既存地	
109	荷台駆 荷台車	高床車	(16.6)				内面から天井部下までが内面ナギ、内面外付は脚部へタグリ。	N7/0~6.6	板幅3mm以下 内面S/35W/1	板幅3mm以下 内面S/35W/1	板幅3mm以下 内面S/35W/1	既存地	既存地	
110	荷台駆 荷台車	高床車	(10.2)				内面は脚部ナギで底点ナギ、内面外付は脚部へタグリ。	N7/0~6.6	板幅3mm以下 内面S/35W/1	板幅3mm以下 内面S/35W/1	板幅3mm以下 内面S/35W/1	既存地	既存地	
111	荷台駆 荷台車	高床車	(16.8)				天井部は内面ナギで外付ナギ。	NNA/0~6.6	板幅3mm以下 内面S/35W/1	板幅3mm以下 内面S/35W/1	板幅3mm以下 内面S/35W/1	既存地	既存地	
112	荷台駆 荷台車	高床車					内面は内面ナギで外付ナギ。	N7/0~6.6	板幅3mm以下 内面S/35W/1	板幅3mm以下 内面S/35W/1	板幅3mm以下 内面S/35W/1	既存地	既存地	

第4章 まとめ

今回の調査では、これまでも述べてきたように大別して上下二つの遺構面を検出した。上層遺構面では中世、下層遺構面では弥生時代後期、弥生時代後期末（庄内式併行）、古墳時代前期（布留式併行）、古墳時代後期の4段階の遺構を同一面で検出した。最後に今回の調査地点について時代順に簡単に述べ、まとめにかえる。

弥生時代後期

弥生時代後期の遺構と考えたのは堅穴住居群である。かなり削平を受けて遺存状況が悪く、これらの住居群に伴う遺物が検出されていないので、厳密に言うなら時期は不明である。ただし、SH01を切っているSK203の出土土器やSH02～04を切っているSD206の出土土器が弥生時代後期末のものであることや、平面形が隅丸方形を呈する点から見て、SH05を除く住居は弥生時代後期のものと考えて大過ないと思われる。

弥生時代後期末（庄内式併行）

弥生時代後期末の遺構としては溝と土器溜まりが検出されている。これらの溝も当初營まれた面よりかなり削平を受けていると想われ、具体的な機能については不明である。ただし、看護大学建設時の調査（以下、前回の調査と呼ぶ）ではこの時期の溝や住居の遺構が見つかっており、今回の調査区が集落の縁辺にあたる可能性がある。

この時期の遺物として、「淡路型器台」と称される特徴的な器台が5点出土している。その内訳は、いわゆる精製のもの3点と粗製のもの2点である。池田毅氏の研究によると明石川流域はこれまでにも淡路型器台が濃密に分布する地域である。ただし、精製のものがほとんどで、粗製のものについては玉津田中遺跡で1点が確認されていただけであった。今回、精製のものと粗製のものが同一遺構から出土したことが確認されたことで「粗製・精製」のセットで受容された可能性も見えてきたのではないかと思う。

古墳時代前期（布留式併行）

古墳時代前期の遺構としてはやや規模の大きな溝が1条見つかっている。使用痕のある関係に近い土器が投棄されたような状況で見つかっていることから、近くに居住域の存在が予想されるものの、前回の調査でも同時期の遺構は少なく、詳細は不明である。ただし、最近の神戸市教育委員会が兵庫県立大学北側隣接地で行った調査では、弥生時代末から古墳時代前期の住居群が検出されており、集落の中心が南から北へ移動したことが考えられる。

古墳時代後期

古墳時代後期の遺構には溝と土壙があり、前段階に引き続いて集落の縁辺部であった可能性が高い。出土している須恵器は陶色編年でいえばTK23～TK47型式に併行するものがほとんどをしめ、同じく明石川流域の玉津田中遺跡でも、この時期に弥生時代とは別の場所に居住域が成立するとされており、明石川中・下流域における古墳時代後期の集落動態を示唆する資料となると考えられる。

包含層出土の須恵器社龜小像であるが、包含層からの単独出土で、遺物の項でも書いたようにどのよ

うな装飾付須恵器に付けられていたものは定かではない。井守徳男氏の研究によれば、これまで明石郡内では9ヶ所で装飾付須恵器の出土が認められ、人物・動物等の小像が付くものの割合が、播磨の他の地域（加古川流域、市川・揖保川・千種川流域）に比して高いという。ただし、集落遺跡からの出土例は少なく、明石川流域では本遺跡例が初めてではないかと思われる。また、生産地については赤根川窯跡で本遺跡よりも1段階新しい段階の装飾付須恵器が出土しているものの、窯跡自体の類例も少なく、現時点では判然としない。なお、本遺跡例については、通常の小像よりも大きいとの指摘があり、間壁阪子氏より「社鹿形土製品」である可能性も考えるべきではないかというご教示を得た。小像の表現には変異が大きく、単純な比較が困難であるが、勝手野6号墳出土船台の社鹿小像の同じ部位と比較しても本遺跡例は3割程度大きい。本遺跡例が装飾付須恵器の小像であるのか、それとも単独の土製品であるのかは、今後出土例の増加を待って、改めて考えてみたい。

中世

第1遺構面では、周辺の条里にそった溝群を検出した。これらの溝の機能については、深度が浅く、掘り直しもされていることから、いわゆる「スキ溝」と考えている。今回の調査では同時期の居住域は確認されていないが、前回の調査で、12から14世紀にかけて営まれた屋敷地が検出されている。特に14世紀代の屋敷地に営まれた建物の方位は溝の方位とほぼ同じであり、両者に関連性があることを伺わせる。

参考文献

- 山下・稻原・松村編『赤根川・金ヶ崎窯跡』明石市教育委員会（1990）
四口圭介編『吉田南遺跡（足田地区）・北王子遺跡』兵庫県教育委員会（1995）
井守・久保・松岡編『勝手野古墳群』兵庫県教育委員会（2002）
池田 紋「括籠期の象徴『淡路型器台』」「水野正好先生古稀記念 続文化財学論集」（2003）
井守徳男「兵庫県出土の装飾付須恵器集成（2）－播磨明石郡及び揖津・但馬」
『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第3号（2003）
多賀茂治「弥生時代後期～古墳時代前期の土器」『玉津田中遺跡—第6分冊一』兵庫県教育委員会（1996）
菱田淳子「古墳時代中期～後期の土器」『玉津田中遺跡—第6分冊一』兵庫県教育委員会（1996）

附章 磨石付着赤色物の顔料分析

藤根 久（パレオ・ラボ）

1. はじめに

吉田南遺跡の調査では、古墳時代後期の溝内から赤色物が付着した岩石が出土した。

ここでは、X線分析顕微鏡を用いて試料面の元素マッピングを行い、赤色物の成分の検討を行った。

2. 試料と方法

試料は、古墳時代後期溝包含層内から出土した岩石1試料である（図1）。

はじめに表面の赤色物元素の分布状態を調べるために、X線分析顕微鏡を用いて元素マッピング分析を行った。測定元素は、アルミニウムAl、ケイ素Si、イオウS、カリウムK、カルシウムCa、チタンTi、マンガンMn、鉄Fe、亜鉛Zn、ジルコニウムZr、水銀Hgである。元素マッピングの結果、水銀が検出されなかっただため、鉄の高い位置を選定し点分析を行った。

測定は、㈱堀場製作所製XGT-5000Type IIを用いた。元素マッピングは、X線導管径100μm、電圧50KV、測定時間3200秒である。また、点測定は、測定時間500sec、X線導管径100μm、電圧50KV、電流自動設定である。定量計算は、標準試料を用いないFP法（ファンダメンタルパラメータ法）で半定量分析を行った。

3. 結果および考察

元素マッピング分析の結果、チタンTiや鉄Feは偏在分布するものの、水銀は得られなかった。このことから、少なく赤色物は水銀朱でないことが分かった（図1）。鉄のマッピング図を見るとその分布において偏在が認められるが、チタンにおいても同様の偏在分布が認められた。

最もFe輝度の高い位置における点分析では、鉄含有量が9.55%、チタン含有量が1.29%であった（表1）。

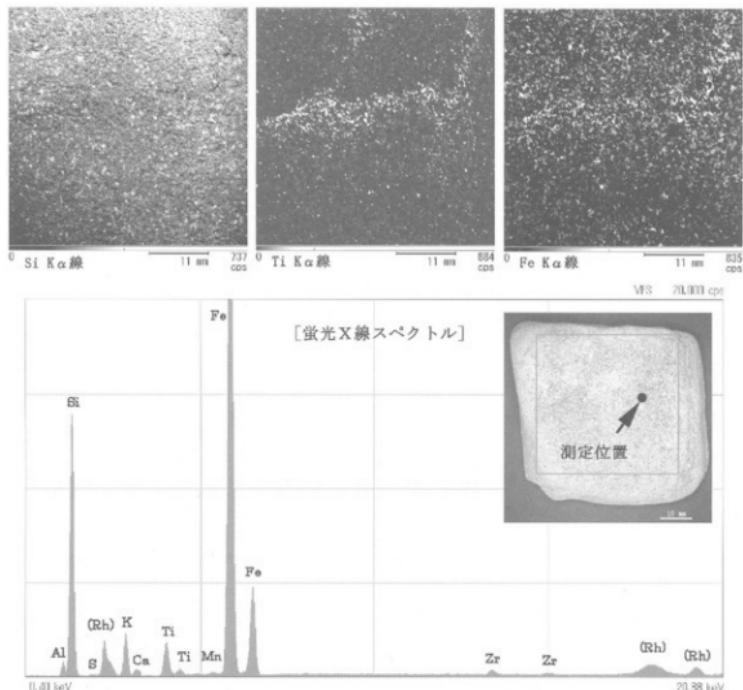
赤色顔料としては、ベンガラ（赤鉄鉱(hematite; Fe₂O₃)）、水銀朱（辰砂；HgS）が知られている（馬淵ほか、2003）。この岩石の元素マッピングにおいて水銀が検出されないことから、この赤色物は水銀朱ではない。

一方、鉄は最大9.55%程度検出されるものの、チタンが1.29%と多く、鉄が偏在分布すると同様にチタンも偏在分布を示すことから、赤色物はチタンを含む鉱物と推定される。これは、ベンガラ鉱物は赤鉄鉱であるがチタンを含まないことから、岩石（砂岩）中に含まれていたチタン鉄鉱(Fe+2TiO₃)などが酸化して赤色を呈していると考えられる。よって、この岩石表面に見られる赤色物は赤色顔料としてのベンガラではなく、本来岩石中に含まれているチタン鉄鉱が酸化して赤色を呈している可能性が高く、かつ顔料の可能性は低いと考える。

試 料	Al ₂ O ₃	SiO ₂	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	ZnO	ZrO ₂	合 計
磨 石	7.41	78.24	0.16	2.97	0.29	1.29	0.04	9.55	0.01	0.04	100

引用文献

馬淵久夫・杉下龍一郎・三輪嘉六・沢田正昭・三浦定俊（2003）文化財科学の事典、朝倉書店、522p.

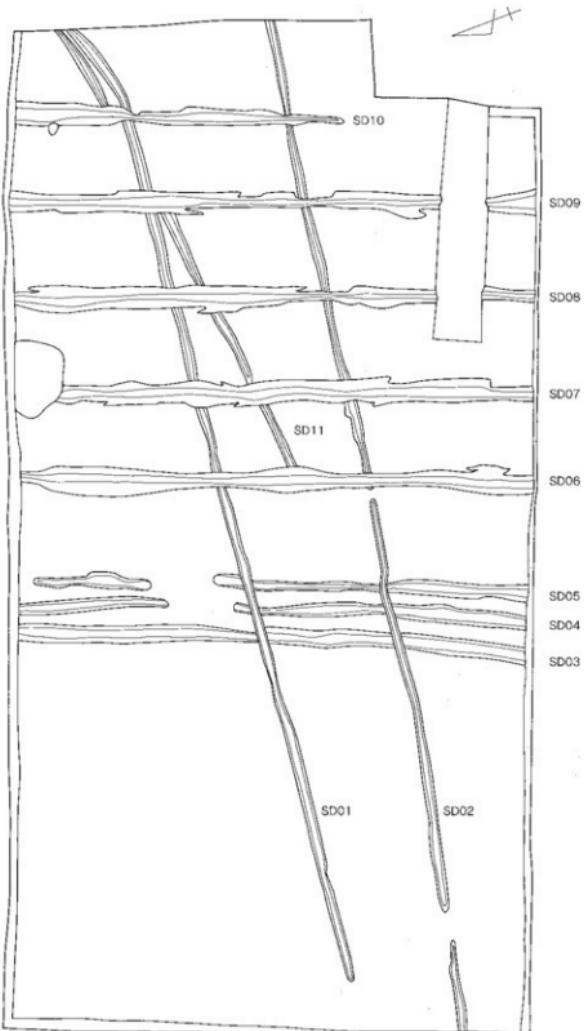


図版1 試料の元素マッピング図と蛍光X線スペクトル図
 上段；ケイ素(Si)、チタン(Ti)、鉄(Fe)の各マッピング図(スペクトル図の□範囲)
 下段；点分析による蛍光X線スペクトル図

報告書抄録

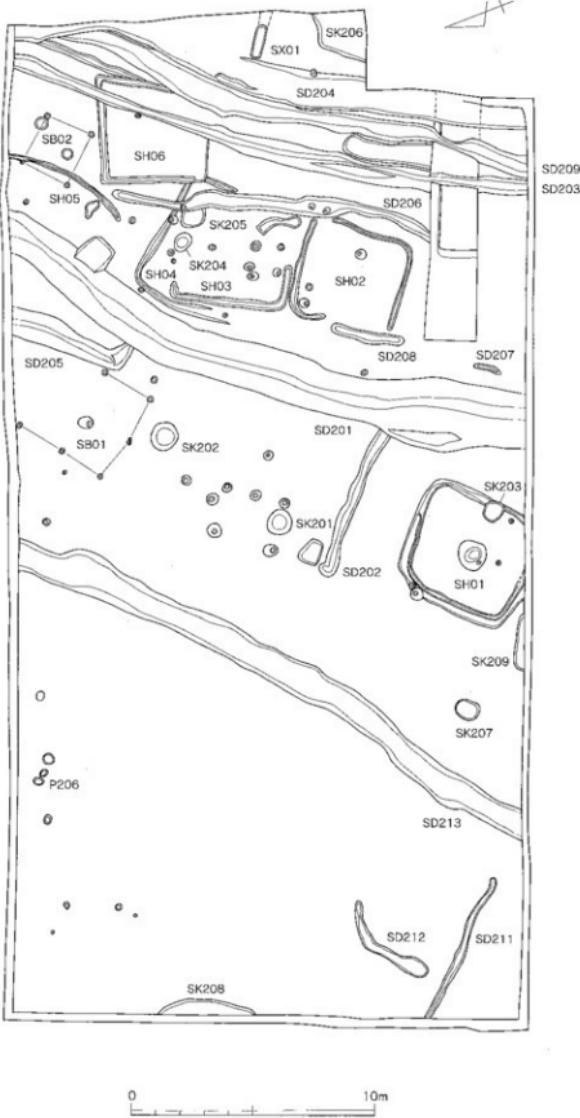
よみがな	よしだみなみいせき						
書名	吉田南遺跡						
副書名	地域ケア開発研究所建設事業に伴う						
巻次							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告						
シリーズ番号	第299冊						
編著者名	飯 美紀						
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所						
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL 078-531-7011						
発行年月日	西暦2006年(平成18年)3月20日						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
吉田南遺跡	神戸市西区玉津町吉田字足田486他	281115 2003133	34度39分19秒	34度58分57秒	確認調査 20030715~0716 本発掘調査 20030818~1016	30m ² 840m ²	地域ケア開発研究所建設事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
吉田南遺跡	集落	弥生時代 終末から古墳時代後期	竪穴住居6棟・獨立柱・建物2棟・満13条・土坑9基	土器・石器	淡路型船形、須恵器小像(牡鹿頭部)		
	生産域	平安時代末～鎌倉時代	溝11条	土師器・須恵器			

図 版

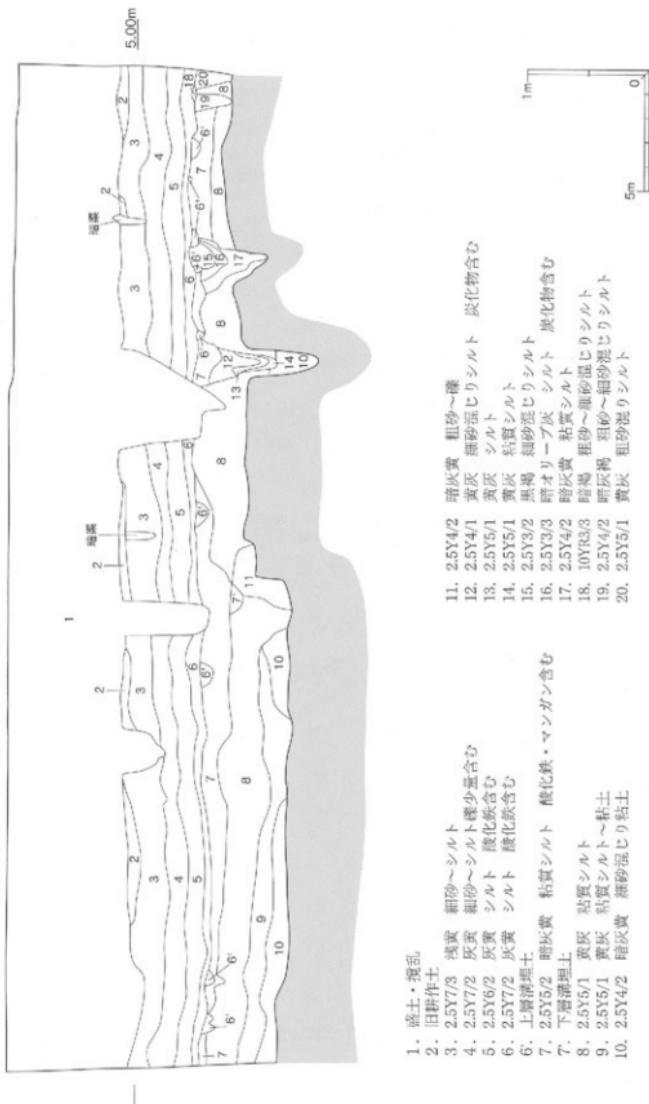


0 10m

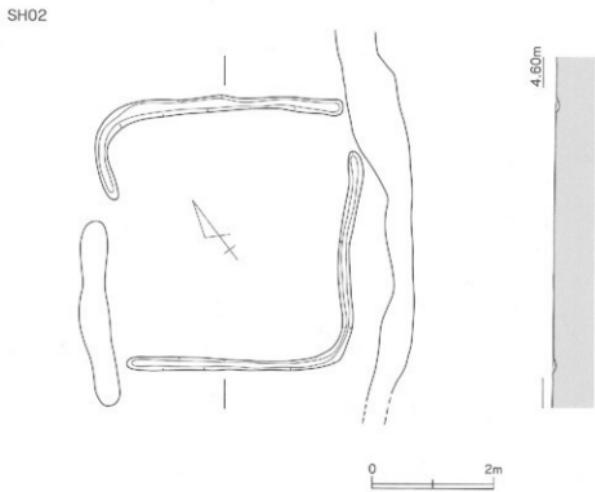
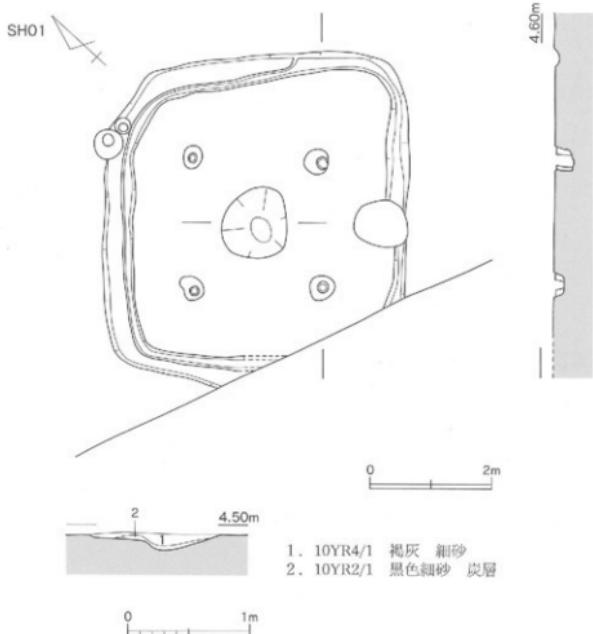
図版1 上層造構平面図



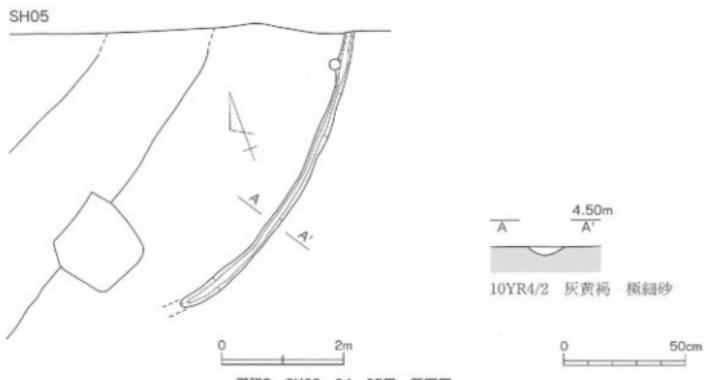
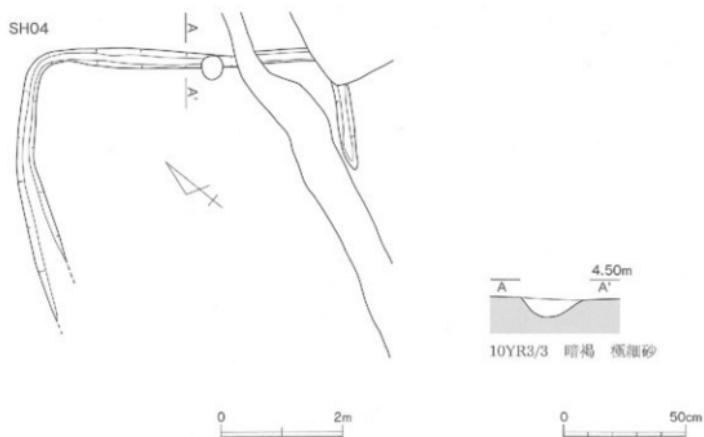
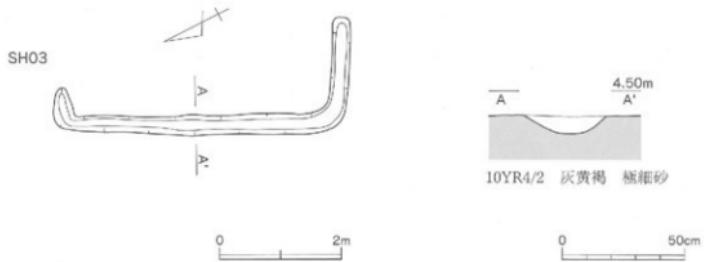
図版2 下層造構平面図



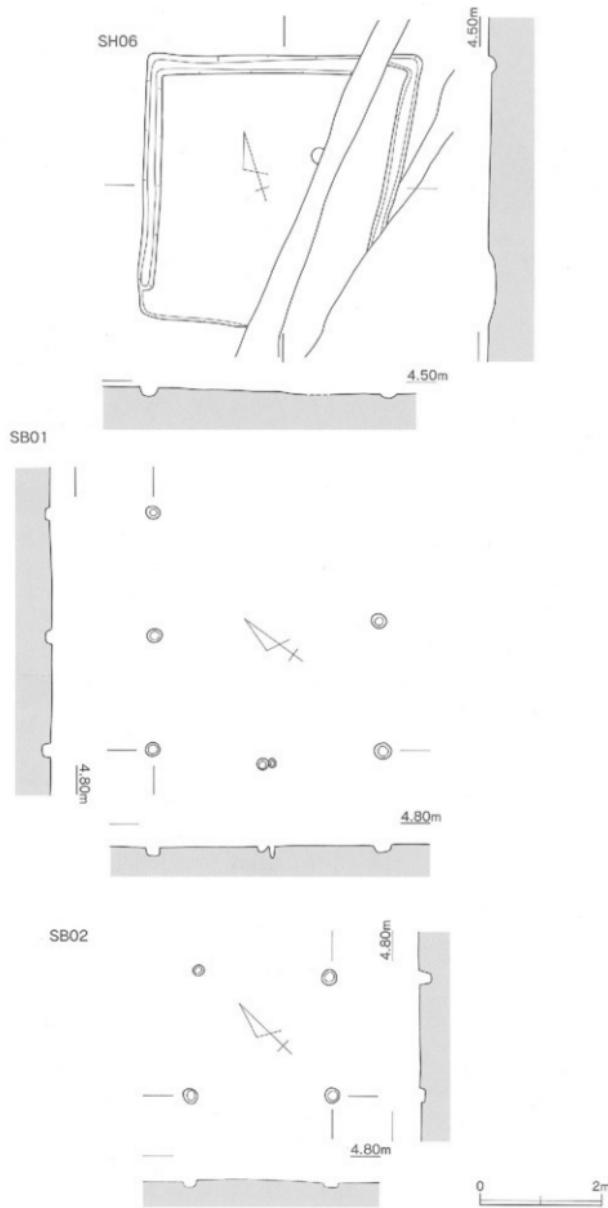
図版3 調査区北壁土層断面図



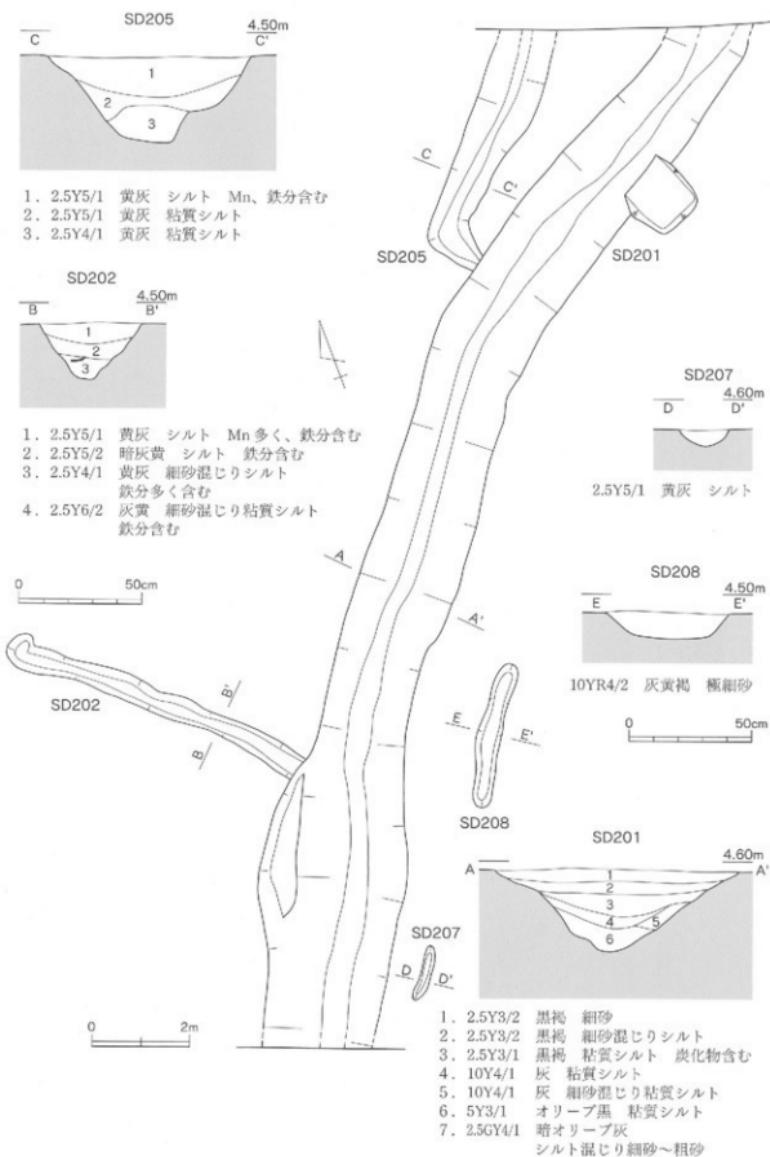
図版4 SH01・02平・断面図



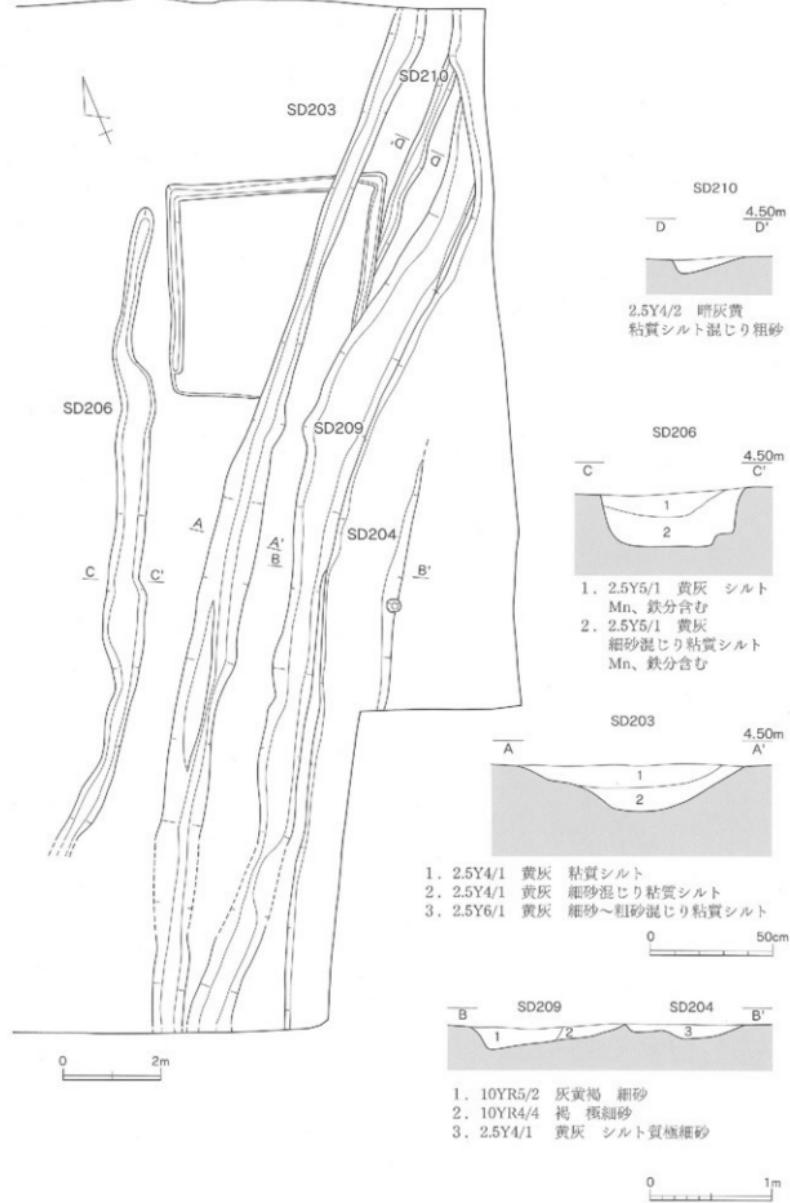
図版5 SH03・04・05平・断面図



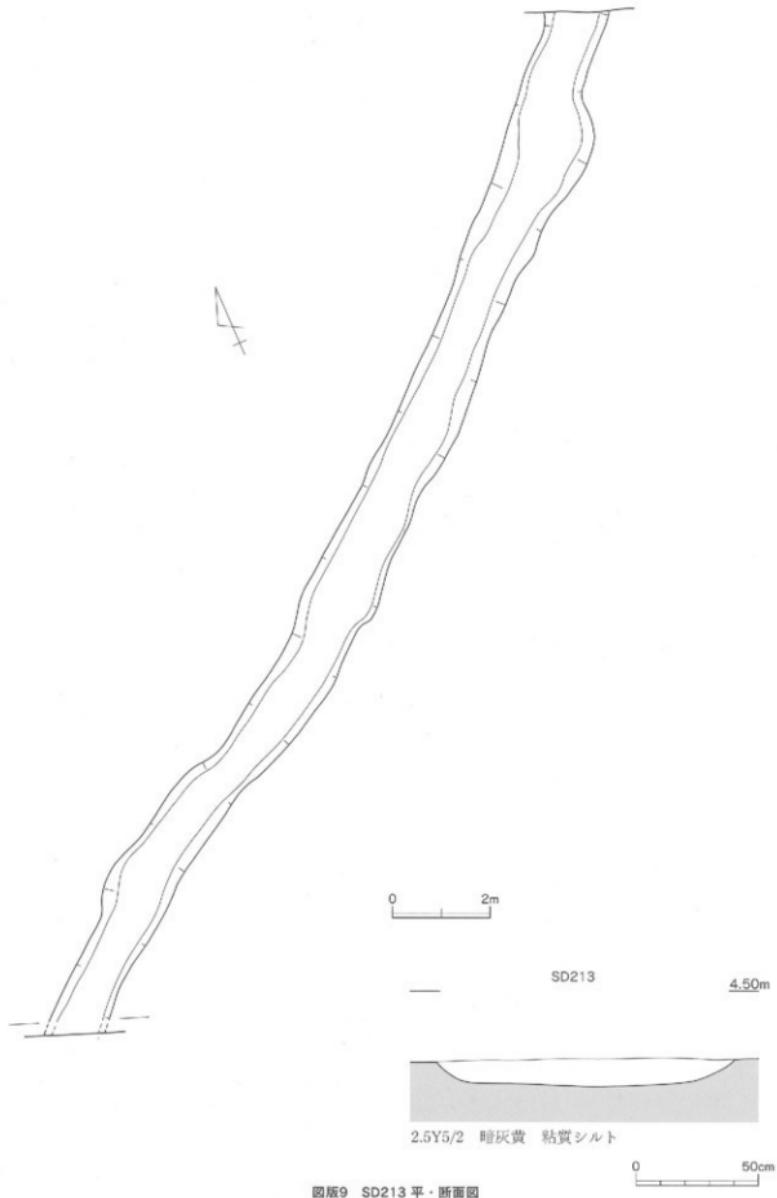
図版6 SH06・SB01・SB02平・断面図

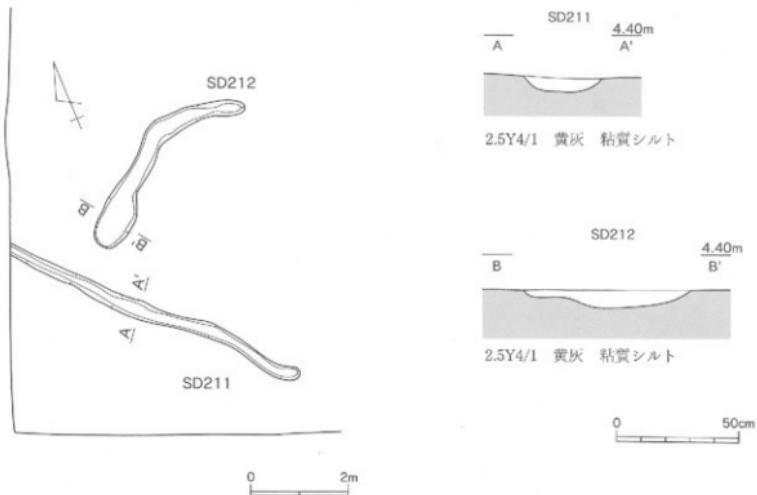


図版7 SD201・202・205・207・208 平・断面図

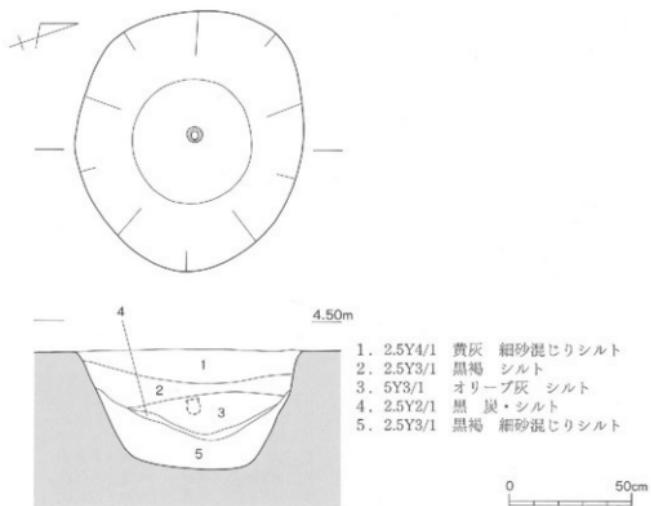


図版8 SD203・204・206・209・210 平・断面図



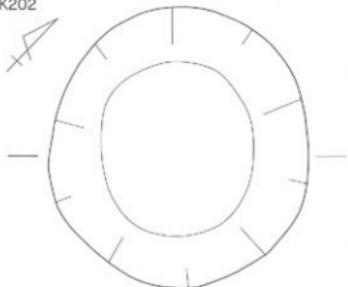


SK201

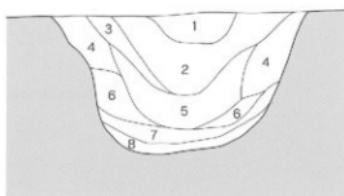


図版10 SD211・212・SK201 平・断面図

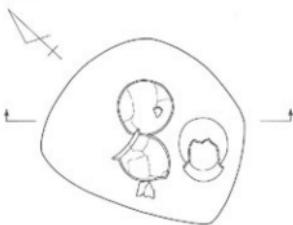
SK202



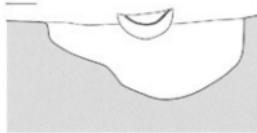
4.50m



SK203

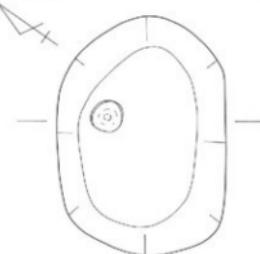


4.50m

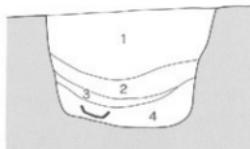


0 50cm

SK207

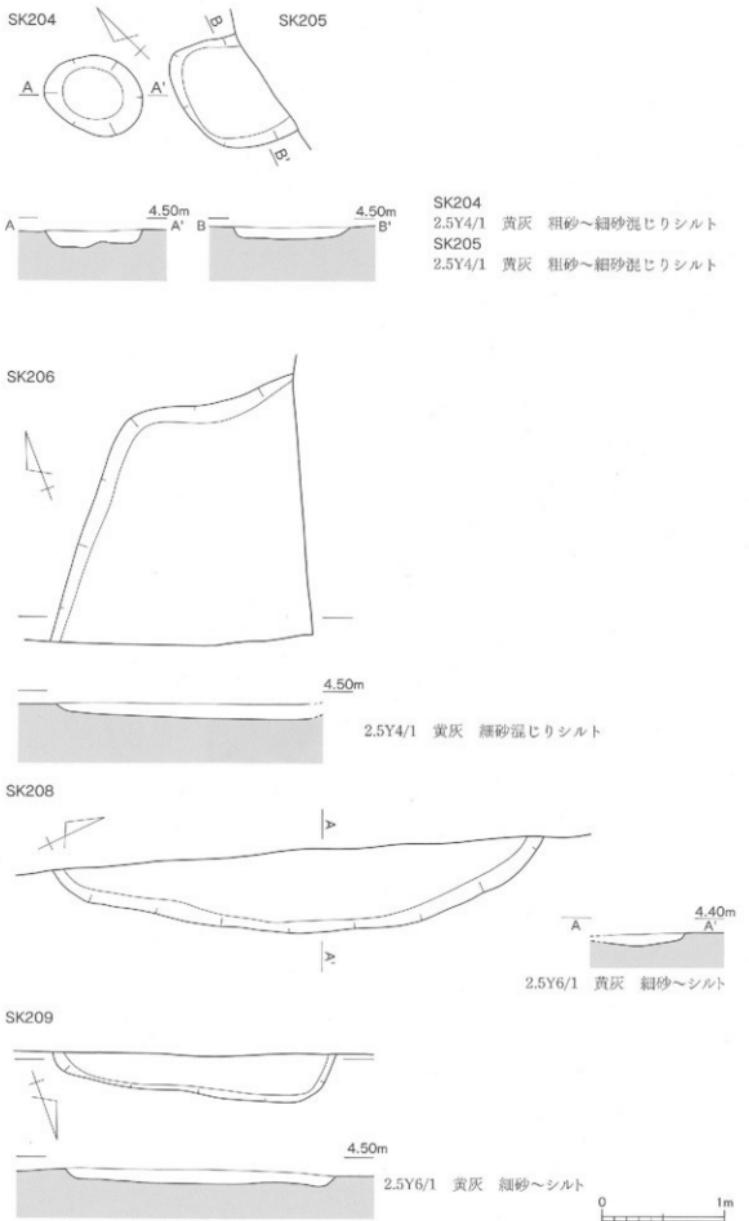


4.40m

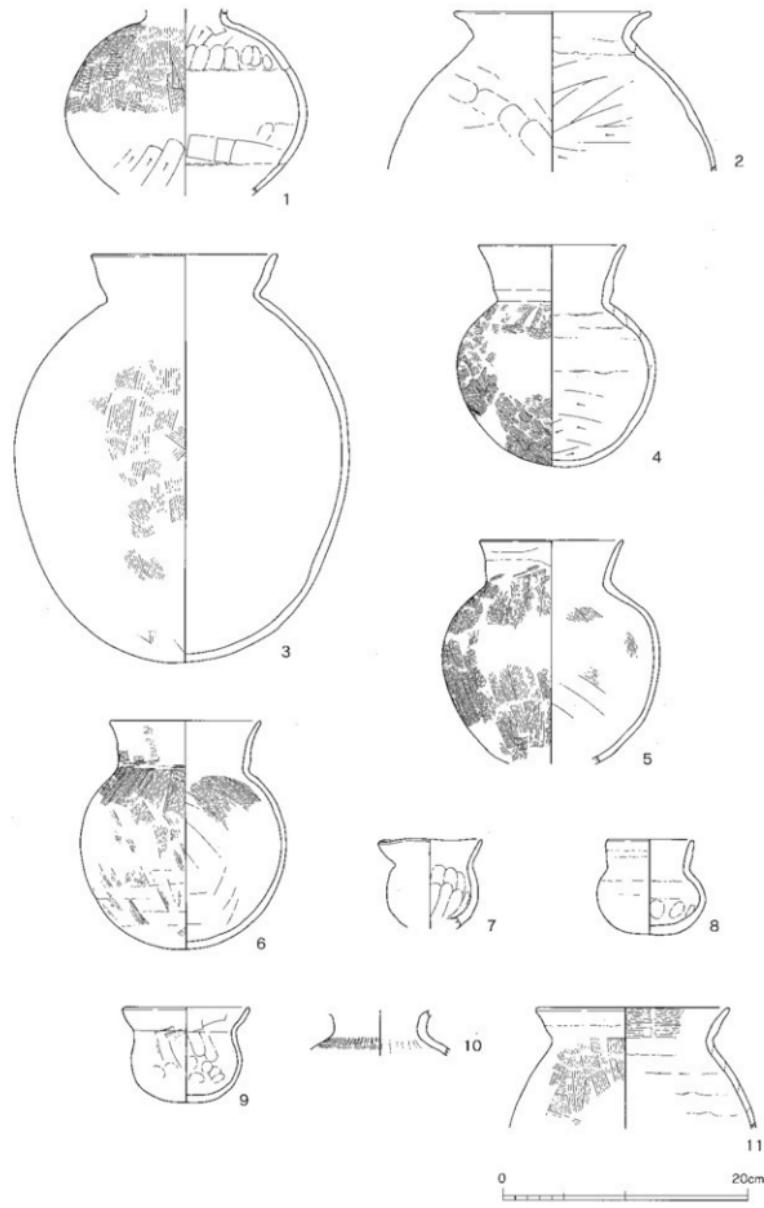


1. 10YR4/1 揭灰 シルト質細砂～極細砂ブロックと
10YR5/2 灰黄褐 細砂ブロックの相互堆積
2. 10YR3/1 黒褐 シルト～粘土
3. 10YR4/1 揭灰 シルト～粘土
4. 10YR3/1 黒褐 シルト～粘土
やや明るい細砂～極細砂ラミナ挟む

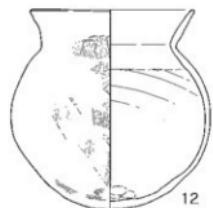
図版11 SK202・203・207 平・断面図



図版12 SK204・205・206・208・209 平・断面図



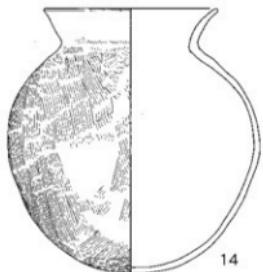
図版13 遊横出土遺物1



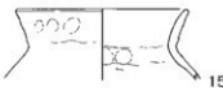
12



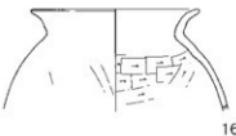
13



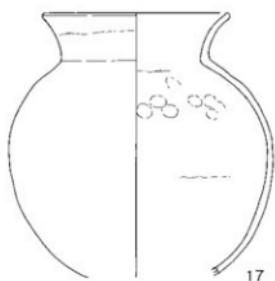
14



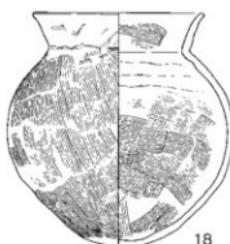
15



16



17



18



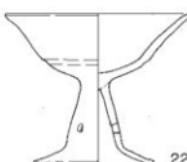
19



20



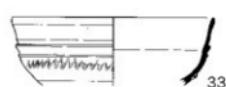
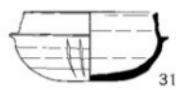
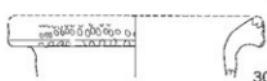
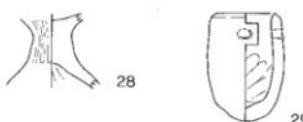
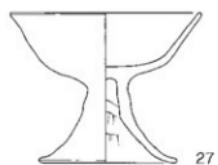
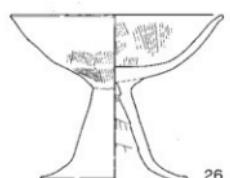
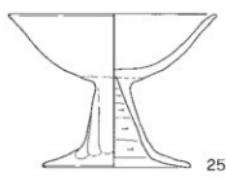
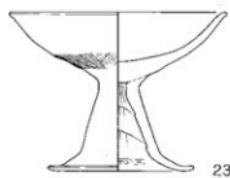
21



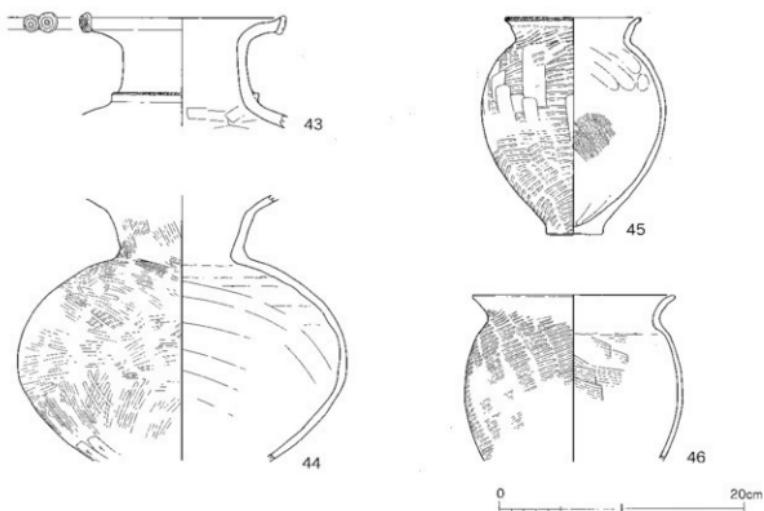
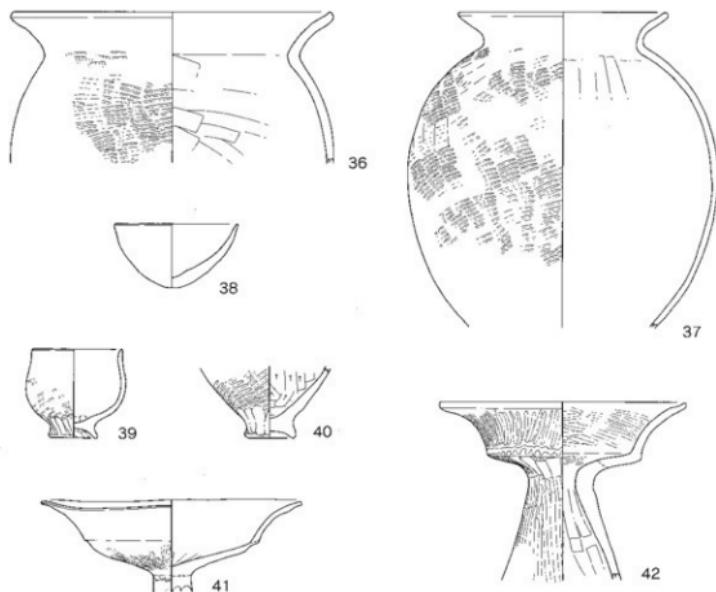
22



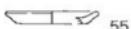
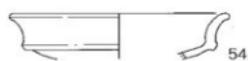
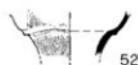
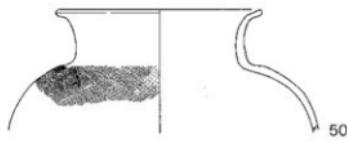
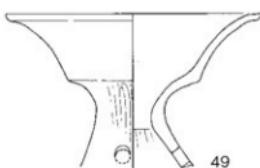
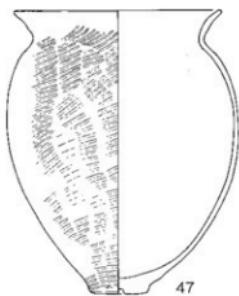
图版14 造柄出土遗物2



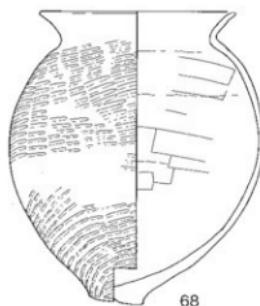
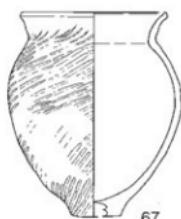
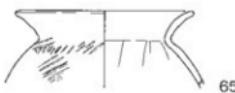
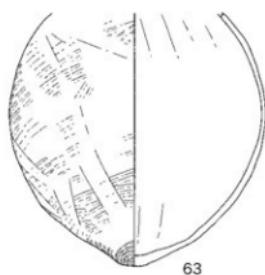
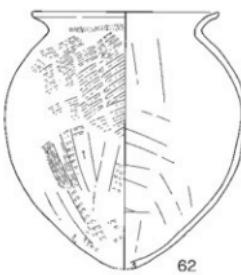
圖版15 退模出土遺物3



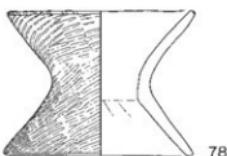
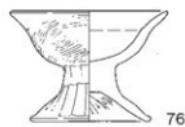
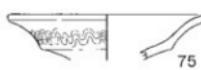
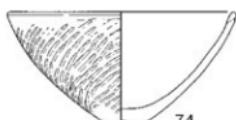
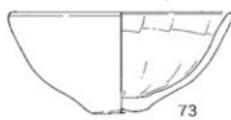
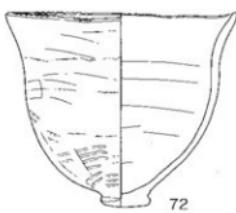
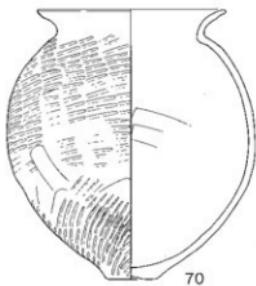
図版16 造構出土遺物4



圖版17 進橫出土遺物5

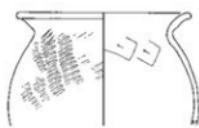
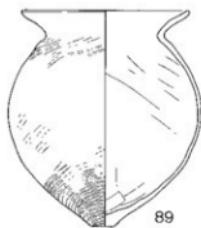
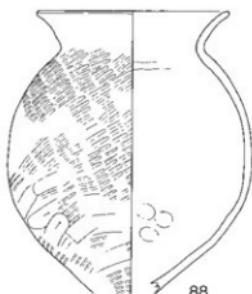
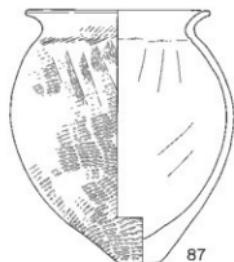
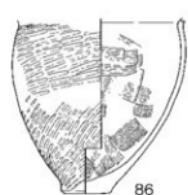
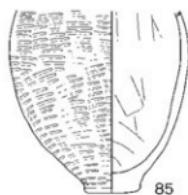
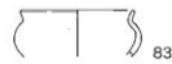
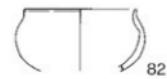
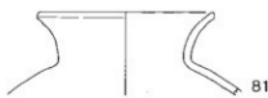
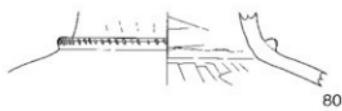
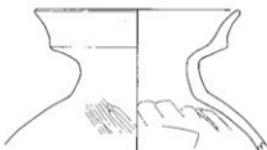


图版18 造構出土遺物6



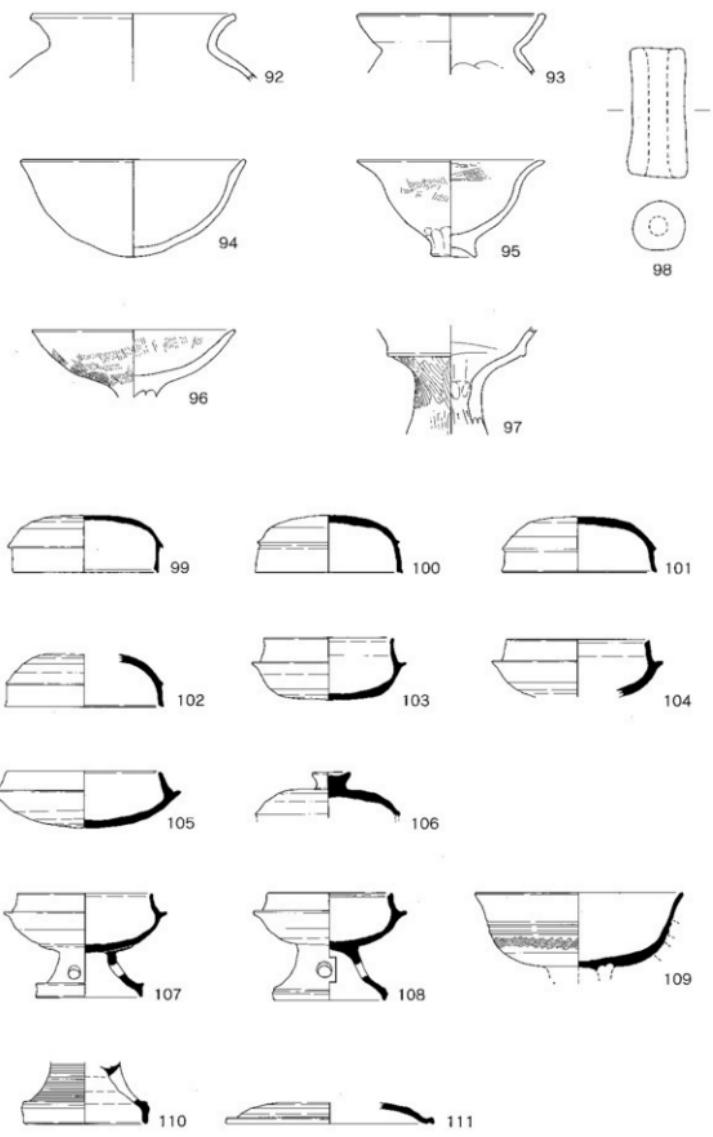
圖版19 遺構出土遺物7





0 20cm

图版20 包含层出土遗物1



图版21 包含层出土物2



写真図版

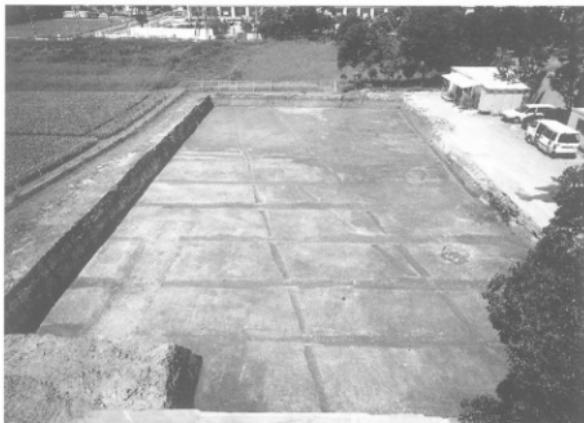
写真図版1



調査地点遠景
上空西から



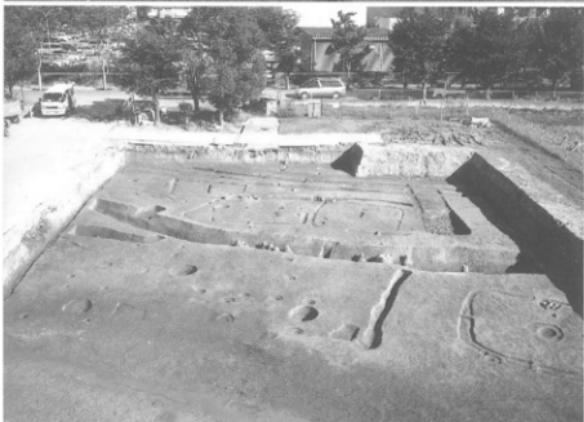
調査区全景
上空北東から



上層造構全景
東から



上層造構
北から



下層造構全景
西から

写真図版3



下層遺構部分
北から



堅穴住居・溝
北から



堅穴住居・溝
西から



SH01
北から



SB01
南西から



SB02
南西から



SK203
西から



SX01 土器出土状況
東から



SX01 土器出土状況
西から



3



4



5



6



7



8



9

出土遺物1



10



14



13



12



17



18

出土遺物2

5

22



22



25



23



24

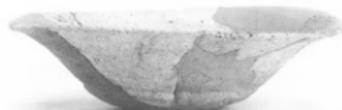


26



27

出土遺物3



21



29



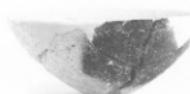
31



32



30



38



39



41



43



50

出土遺物4



42



48



44



51



57



49



60



58

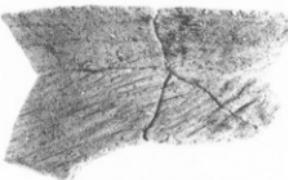


59

出土遺物5



61



64



67



66



68



69

出土遺物6



70



71



72



73



74



75



76

出土遺物7



79



80



90



95



97



98

出土物遺物8



99



100



101



105



107



108



109

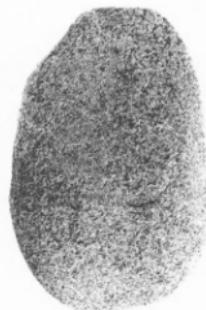
出土遺物9



112



S1



S2

S3

出土遺物10

吉田南遺跡

－地域ケア開発研究所建設事業に伴う発掘調査報告書－
2006年(平成18年)3月20日

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒672-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

発 行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印 刷 株式会社 旭成社

〒651-0094 神戸市中央区琴ノ緒町1丁目5-9